

6545 15-4-1

緑丘

1965 Vol. 4
No. 46



緑

丘

(38)



新発売——セン抜き無用



緑丘

全国版

(通巻)No. 46号
(40年度4号)

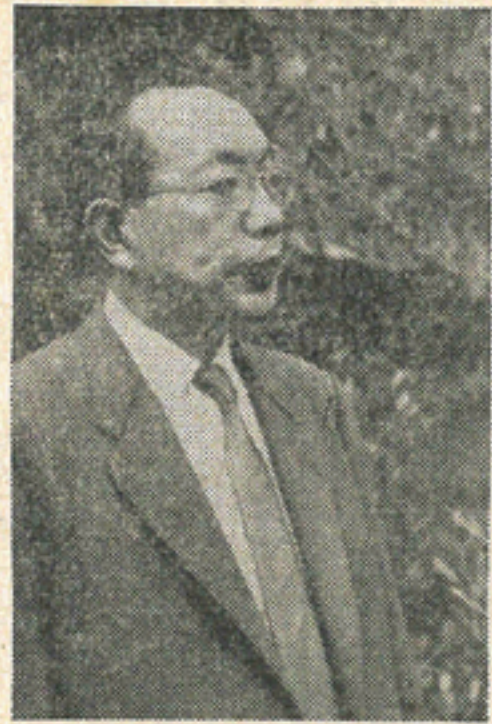
(編集責任者)
大阪市東区道修町三の一
塩野義製菓株式会社内
兼目英三

(緑丘大阪支部)
大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階内
サッポロビール(株)

混沌の学長選挙



加茂儀一先生(小樽商大元学長)



大泉行雄先生(神奈川大学教授)

小樽商大学長事務取り扱い

松尾正路教授

十一月七日で加茂儀一学長の任期

が切れた。次期学長に選ばれた神奈川大学教授大泉行雄氏が就任をことわったままなので、八日文部省にたいし、母校筆頭教授松尾正路氏を学長事務取り扱い者に任命するよう上申したと伝えられる。

今後如何なる結末をつけるであろうか。学内のことは学内において処理されるであろうが、同窓会は助言者であってはならないものであらうか。一日も早く学長の選挙をすませてほしいものである。大泉博士が学長を辞退されることは「香川大学経済論叢大泉博士記念号」を一読された教授連中には判っていた筈だ。

学長選挙の経過

今般加茂学長任期満了(十一月七日)を控え、小樽商大の学長選挙は十月二日午前十時から正午まで同校で行なわれたが、加茂儀一氏、大泉

行雄氏、実方正雄氏(昭二、大阪国立大教授)がいずれも過半数に達せずこのため上位二人の大泉、加茂両氏が決戦投票を行なったが、これも過半数に達せず、同校協議会では後日再度学長選挙を行なうことを四日告示した。

十月六日午前十時—正午 学長候補者となるべきものの推薦投票。

十月十日午前十時—正午 学長候補三人を選挙する投票。

十月二十七日午前十時—正午 学長候補予定者の選挙投票。

十月二十七日、選挙の結果、大正十一年卒大泉行雄氏(神奈川大学教授)に決定した。

北海道新聞によれば大泉氏は「これからは本来の研究活動に専念したい」と思っており、学長を引受ける気はない」と母校学長に就任する意志のないことを明かにした。

国立大学の学長は、教授、助教授などの投票で選出、本人の承諾をえたあと、文部大臣に上申、閣議に報告されて正式に発令されるが、本人が断ったときは新たに候補者を選出しなければならず、母校の場合も大泉氏が就任の意思がないことを明らかにしたことによって、加茂学長の任期が切れる十一月七日までに再選挙となる予定のところ任期切れで加茂学長は丘を去った。



佐伯建設(株)

総合建設機械のトップメーカー

KYC 光洋機械工業株式会社

取締役社長 奥村正美(昭17)

本社	大阪市北区南同心町1丁目12番地	電話大阪(06)3091~5
大阪営業所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(351)2039・(358)6531~3番
東京営業所	東京都千代田区神田鎌倉町6番地	電話東京(252)2012・(254)5601~5番
上野営業所	東京都台東区上野1丁目20番地	電話東京(832)8819・8820番
福岡営業所	福岡市中浜口町19番地	電話福岡(28)4161~4164番
広島営業所	広島市東平塚町2番12号	電話広島(41)6525・8435番
関西出張所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(358)6534番
近畿出張所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(358)6535番
高松出張所	高松市塩上町1181番地	電話高松(3)4392・2771番
鹿児島出張所	鹿児島市加治屋町16の10番地	電話鹿児島(2)3055番
名古屋出張所	名古屋市東区堅代官町14番地	電話名古屋(941)1315・2860番
富山出張所	富山市豊川町1番1号	電話富山(2)6505・2379番
仙台出張所	仙台市北2番丁83番地	電話仙台(25)4441~3番
札幌出張所	札幌市南11条西8丁目541の2	電話札幌(25)9868・(26)7964番
工場	寝屋川工場・守口工場・吹田工場・所沢工場	

あらゆる建築設

設計・施工



暖冷房設備・空調設備
給排水設備・衛生設備
配管工事全般

日邦工業株式会社

取締役社長 井 薬 政 市

相談役 宮 地 邦 介 (大11)

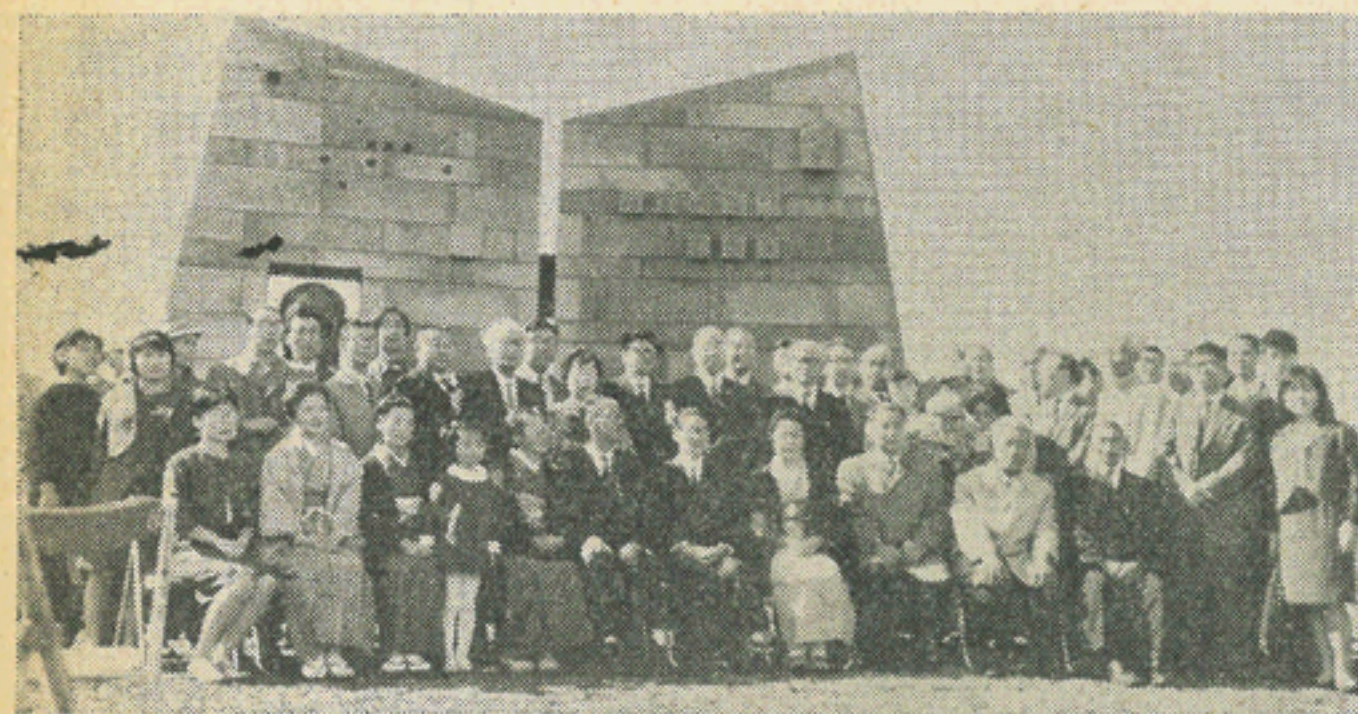
本社 大阪市西区南堀江1丁目3番地 電話大阪(531)代表 8461~5番

出張所 堺市浜寺石津町東2丁目702番地 電話堺(41)0776番

盛大に除幕式

小林多喜二の文学碑

小樽に育ち、すぐれたプロレタリア作家、小林多喜二の文学碑が港小樽を望む同市旭展望台の上に建ち、十月九日午前十一時から安達小樽市長、加茂小樽商大理事長、伊藤整氏らに、労働者など二百人が出席、除幕



多喜二文学碑前の記念撮影

式が行なわれた。

碑は新作協会所属で、本道出身の本郷新氏が制作した高さ五尺の大碑。本を見開きした形で、右側の上段には北極星と北斗七星が彫られ、中段に高さ六十センチの「労働者の顔」(ブロンズ)がはめ込んである。

一方、右側は上に多喜二像のレリーフと「小林多喜二文学碑」の文字盤が配列されている。また中段には治安維持法でとられ、獄中から友人にあてた手紙の一節「冬が近くなると、ぼくはそのなつかしい国のことを考えて、深い感動に促えられて……」という一節が、青銅の板に書かれてある。

この日の除幕式は、浜林正夫小樽商大教授から経過報告があり、ついで建設期成会の発起人を代表して安達小樽市長が「小樽でもっとも見晴らしのいい大地に多喜二碑が建てられたことは喜ばしい」とあいさつした。このあと碑をおおった大きな赤旗を多喜二のメイ池田和枝さんの二女みゆきちゃん(五つ)と小樽市朝里幼稚園Ⅱが、出席者の拍手のうちに引

いた。

作家の伊藤整氏、評論家の蔵原惟人氏らが祝辞を述べたあと、碑に花をささげた。また多喜二の義兄佐藤藤吉氏が遺族を代表してあいさつした。引続き正午から多喜二が学んだ小樽商大(前高商)の学生会館で記念パーティー、午後二時から懇談会が催され、多喜二のゆかりの人たちや労働者が彼をしのんだ。

(北海タイムス所載)

緑丘通信

☆第八回日経経済図書文化賞候補に
古瀬大六著
「生産の経済学」

昭和三十九年八月一日から四十年七月三十一日までの一年間に国内から出版された経済図書を対象に、一橋大学名誉教授中山伊知郎、芝浦製作所社長西野嘉一郎(大一一五)など十一名の審査員によって日本経済新聞と日本経済研究センターが共催で審査の結果、経営会計部門で母校教授古瀬大六著「生産性の経営学」経営合理化の生産編」が最終審査まで残ったが惜しくも受賞に洩れる。

暖かく眠らせ度い多喜二碑

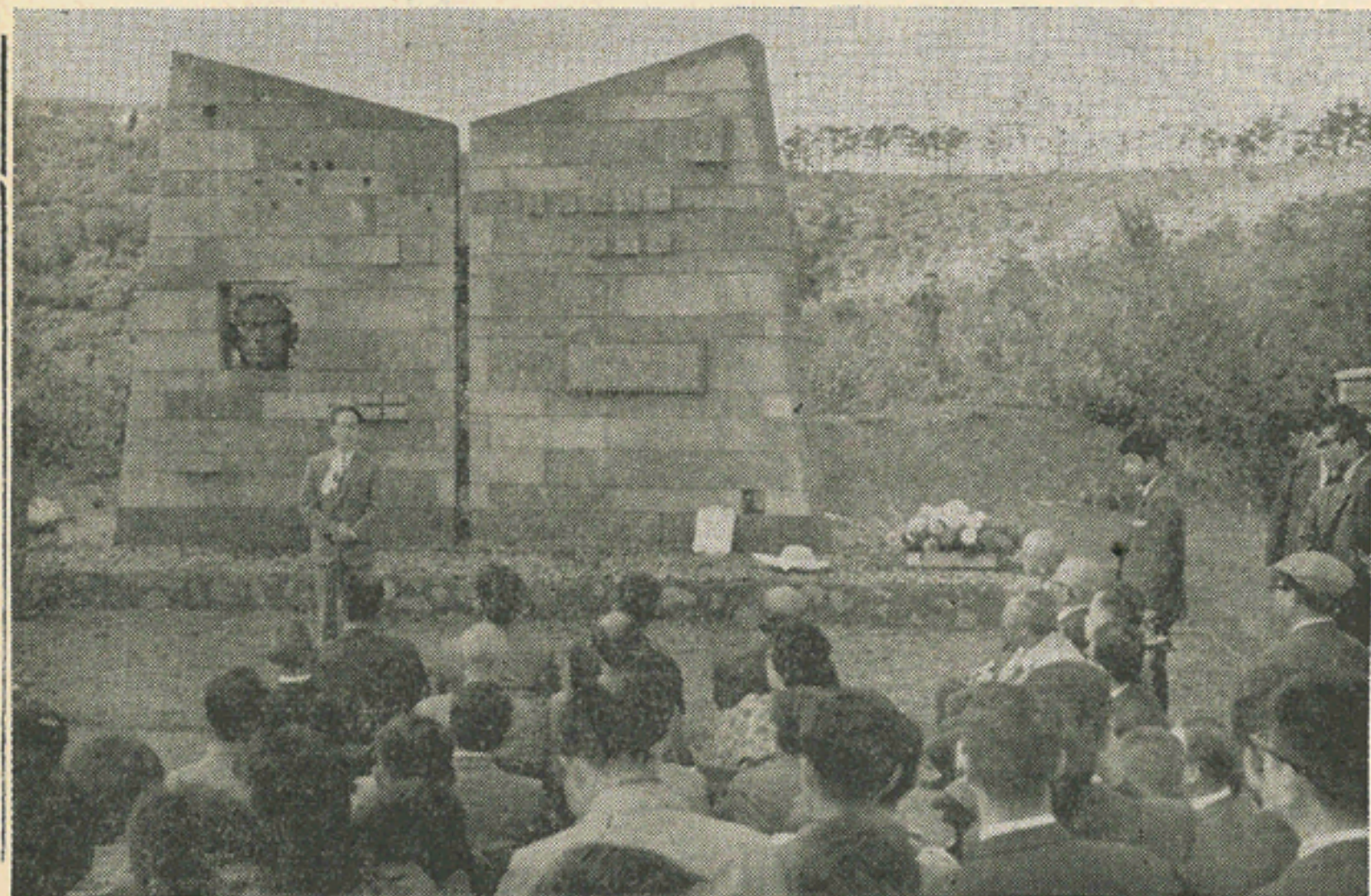
郷里の人々の愛情の中に

伊藤整 (大一一四)

十月九日、小樽市の展望台、即ち、商科大学に向って右手の、もとの市立高女のうしろの高台で、いまは道がついて車でのぼれる行楽地になつてゐる展望台に、小林多喜二の碑が建てられ、その姪のお嬢さんの手で除幕された。本郷新氏の手になる碑は、幅七メートル、高さ五メートルほどの石壁で、二枚の本の頁を開いた形をし、右の上方にその横顔の浮彫があり、左の中心に労働者の首が大きくはめ込まれている。

この計画が実を結ぶについては、実行委員会の責任者だった浜林正夫教授の大変なお骨折りがあつたが、本誌の編集長墓目英三氏の特輯によつて、卒業生たちの力が集められたことも大きく働いたものと思う。まことにありがたいことであつた。

除幕式には小林多喜二の弟さん夫妻、姉さん夫妻、二人の妹さんと家族などが参加し、安達市長、加茂学長、故人とかかわりのあつた多くの人々が加わつた。東京からは評論家として蔵原惟人、瀬沼茂樹、庁商時



伊藤整氏 多喜二の文学碑前で

代の親友蒔田栄一、それに後輩で故人と同業の私も出かけて参加した。桜井長徳、武田暹、大月源三という小林と縁の深い人々も姿を見せた。そのあと記念のパーティーを大学の学生会館で開き、旧知の人々の懇談会が行われた。その前夜に小樽市の公会堂で。その当日の夜札幌で講演会が行われた。

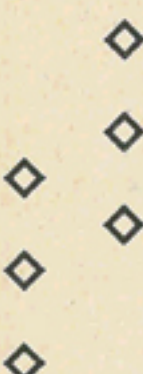
改めて小林多喜二の文学上の意味を書くことが必要だとは思われないが、とかく政治的に見られ、扱われがちな故人を、一人の文士として、郷里の人々の愛情の中にあたたかく眠らせたいというのが私の願いである。

ほかのところでも書いたが、私は文学碑というものに賛成しない。あちらにもこちらにも文士の碑が建てられすぎると思う。時としてそれは押しつけがましき、時として恥かしいことである。もつと世間のため、学問のためになつた人々が多いので

あるから、文士はあまり公園などで目立つ所に碑を立てるべきでない。これが私の持論である。しかし小林多喜二については、碑がほしいのである。彼は作家としてよりも、政治的意味において論ぜられすぎて、それは私の目からみると淋しいことであり、辛いことなのである。

文士なる彼が、たまたま政治の渦に巻き込まれたために、特別な意味を持たされすぎていることを、何とかして改め、郷里の人々に別個なイメージを持つようになつてやりたい。今度の碑も、実は政治的色彩を拭い切つたものとは言われない。しかし事は過去に属している。いづれ今後は、次第に、彼は正義を求めた一人の若い文士という単純な姿で人に親しまれることとなつてゆくであろう。

故人についてさきの特集号によせられた多くの人々の思出の記はまことにありがたいものであつた。これまで彼について書かれたことを、それによつて訂正しなければならぬ面もあり、あの特集号は、文学史の重要な文献となるであろう。助力をされた多くの緑丘人に感謝し、立派な碑が完成したことをお知らせしたいと思う。



美しくスマート… 昭和コーニアのアルミ建材

- 営業種目 ●アルミニウム製建材製品の製造・加工ならびに販売・取付
●ドア ウィンドー 間仕切り ストアフロント エントランス各部
●カーテンウォールおよび同付属品

本社 東京都千代田区神田美土代町22 四国ビル TEL. 293-6721(代)
大阪営業所 大阪市北区小松原町27 富国生命ビル TEL. 312-1026(代)
工場 栃木県小山市大字犬塚1028 TEL. 小山2-2165
取締役社長 山田 勇



昭和コーニア株式会社

スカルノ大統領会見顛末記

板垣与一 (昭四)

八月十七日の独立二十周年記念式典は終ったが、式典に参列した海外からの賓客の接待でスカルノ大統領の身辺は多忙をきわめていた。私の単独会見の機会がはたしてやってくるかこないか、心配はつるばかりであった。そのうち日本から東南アジア派遣親善国使節団の荒船清十郎代議士一行がやってきた。八月三



(右から) スカルノ大統領と板垣与一氏

十日に大統領と会見することがわかり、斎藤鎮男大使の薦めにしたがつて共同会見の仲間にいれてもらうことになった。

当日午前十時四十分、大使秘書官本書記官同道で私はムルデカ宮殿におもむき、ロビーで荒船代議士一行の到着を待っていた。訪問客名簿に署名し、壁間をかざるパンゲラン・ディボネゴロの勇壮な馬上の奮戦ぶりをえがいた大きな油絵や、デッサンの彼の肖像画を眺めているうちに定刻十一時に大使の先導で一行があらわれた。待ちかまえたように扉が開かれ、私も一行に加わって謁見室に入った。ひとりひとり大使の紹介で大統領と握手をかわした。私の名前が紹介されたとき、大統領は私の顔をみつめて、「板垣將軍の身内のものかね」ときかれたので、「縁者ではありません」と答えた。大統領が最後まで私の名前を記憶されたのは、これが機縁になったようだ。荒船使節団長はまず大統領の健康を祝福し、それから日本とインドネシアとの経済協力関係促進に関する一般的な問題について、大統領と談合された。荒船さんはいへん明朗

潤達な人柄で、会話のやりとりもきわめてざつぱらで、そばで聴いていても気持ちよく、すっかり大統領の気に入られたらしく、やがて「おたがいに友達になろう」といいながら大統領は突然に両手を出して荒船さんに握手されようとした。そのとき荒船さんの左手の指先の包帯を目ざとく見つけて、「その傷はどうしたのだ」と訊かれた。そのとき荒船さんはすかさず、「いやこれは昨夜インドネシアの美人に噛みつかれたのですよ。大統領も日本へお出のとき日本の美人に噛みつかれないよう用心して下さい」と、ユーモラスな冗談を飛ばしたので、一座は大笑いとなった。大統領もそれには負けず「いや自分なら、日本婦人に噛みつかれる前に、こちらからさきに噛みついて離れさせよう」とやり返したので、さらに大笑いとなった。私は大統領の機智に深く打たれると同時に、この会見を通して、スカルノ大統領の日本認識の深さと、日本人に対する愛情の深さに強い感銘を受けた。

三十分の会見時間も終りに近づいた。大使の目くばせで、私は席を立って大統領の前に進み、かねて用意していた筑摩書房の「日本文化史」第二巻(平安時代)と第五巻(桃山時代)の二冊を献上した。右の年代を西洋暦になおして簡単な註釈を加える私の説明にうなづきながら、「二巻と五巻だけであとはどうしたのか」と大統領は私の顔を見上げた。「全部で八巻で完結するのですが、私の出発前に漸く二冊目が出版されたのです。あとの分は刊行され次第

お送りいたします」と私は約束した。大統領は私の贈物をたいへん喜ばれ、頬をほころばせながら、「自分は日本文化の遺産を高く評価している。自分もインドネシア文化の個性と独自性について、いつも強調している。およそ国家の建設というものは、芸術家のような創造的精神をもってやるべきものなのだ。国家は芸術品である」と、力強く言い切つて立ち上った。「板垣教授は文化に非常に興味をもっておられるようだがこれを見給え。これは千四百年前の支那の磁器製観音像だ。またこれは二百年前のバリ島のガルーダ(霊鳥)の木彫だ」と誇らしげに指さされた。次に指さされたのは伊東深水筆の美人面の大作だった。これは首相官邸にあつたものを、大統領が所望されたので池田首相から贈られたものである。眼の切れ味に知的な鋭さを感じさせ、やや横向きの姿勢にやわらみのある艶麗さを漂わせていた。あとでスカルノ大統領の第三夫人デビイさんのプロフィールにそっくりであるのを知った。

私の側にいた斎藤大使は大統領に向つて、「板垣教授は日本における有数のインドネシアの研究者で、大統領からパンチャ・シラのことについて、親しくお話をききたいと希望している。短時間でよいから是非お願いしたい」と口添えしてくれた。「パンチャ・シラのことなら、二時間でも三時間でも話さねばならない。それでは火曜日にきめよう。時間はあとで知らせる」と、大統領はその場で待望の単独会見の日どりを

緑 丘

きめてくれた。共同会見をしたために単独会見の機会が失なわれるのではないかと、内心不安を感じていた私の杞憂は一挙にふきとんだ。

九月二日、待ちに待った大統領との会見の日がやってきた。日章旗を風ひるがえしながら進む大使の車に同乗し、インドネシア語にかけては第一人者といわれる永井重信書記官を帯同、ムルデカ宮殿の正門から入った。応待に出た大統領秘書も私の来訪を予期していた。官邸のロビーで同じく大統領との会見を待っているマルタディナタ海相ほか三名の海軍将官と、しばらく話し合った。将官連が大統領との会見を終わりに、私たちが謁見室に入ったとき、時計は十時五十分を指していた。

もはや自己紹介の必要もなく、すすめられるままに私は大統領のすぐ右側の椅子に腰をおろした。大統領の右側にはルスタン・アブドルガニ國務相が附添えとしてすわっていた。斎藤大使は机をへだてて正面に永井書記官は大使の右側に座を占めた。私は英語で話しすることの許しを乞うて、さっそく切り出した。私は次の十の質問を用意していた。

(1)一九四〇年の十二月中旬、閣下がまだ配所の月を眺めておられるスマトラのベンクレーンの町を訪れ、閣下が住んでおられた邸を外側から眺めて敬意を表しました。スマトラ在住三十年という日本人雜貨商の鶴岡さんから、閣下の日常生活の様子を聞き、また近代日本の歴史、孫文の三民主義、ケマルのトルコ革命などに関する沢山の書物を蒐めて、さかんに勉強しておられることをき

きました。パンチャ・シラの国家哲学はもちろん閣下の独創的な思想であることは知っていますが、この時代の研究がパンチャ・シラ思想の形成に何らかのヒントを与えたでしょうか。パンチャ・シラ発想のいきさつについて。

(2)同じく四〇年、四一年のころ、閣下はムハデチャー協会の回教教師に任命されたり、ベンクレーンの同協会支部長に任命されたのは、どういう理由ですか。ムハデチャー運動が推進した回教近代主義の改革思想や実践を、どのように評価しておられますか。閣下のイスラームに対する考え方について。

(3)閣下は、インドネシア文化における民族個性(カプリバアアン)を力説されますが、それとの関連でキ・ハジャール・デワントラによって創始された。タマン・シスワ運動の思想や業績を、どのように評価しておられますか。

(4)インドネシアの民族個性はゴト・ロヨン(相互協力)であり、パト・シラ(建国五原則)はインドネシア民族個性の体現である、と演説のなかで述べられていますが、それをどう理解したらよいでしょうか。

(5)パンチャ・シラとナサコム体制とのあいだに、論理的な必然的關係があるとするならば、それをどう説明したらよいでしょうか。

(6)「指導される民主主義」という理念にふくまれた指導性の社会的・文化的基礎は何か。村落レベルで妥当する民主主義を、そのまま国家レベルまで拡大することは、理論上困難があるのではないのでしょうか。

(7)マルハエニズムはインドネシア型の社会主義と同一の概念か。その理論的基礎は何か。マルクシズム理論とのあいだにどんな関係があるか。

(8)一九一七年にオランダ人のパウルスからマルクシズムの理論を最初に学んだということですが、そのとき彼はどんな教え方をしましたか。

(9)民族的統一や団結を基礎として発展する民族革命と、統一や団結を破壊する階級闘争を基礎として推進しなければならぬ社会革命との関係を、どのようなやり方で調和しようと考へておられるでしょうか。

(10)インドネシア革命の理念は「諸革命の革命」であり、それは「人類革命」の理念につながっているといわれるが、どういう意味でそうなのでしょうか。

第(5)の質問にまでおよばないうちに会見の時間は切れて十二時になりました。しかし第(6)の質問は第(4)の説明のなかで十分に答えてくれたので、半分は目的を達したといわねばならない。私は、この会見を通じて、スカルノ大統領の革命思想の性格と革命実践の特質に関して多くのことを学んだ。わけても彼のイスラームに関する認識の深さに強い印象を受けた。(私の質問に対してスカルノ大統領が語ったすべての内容については、「生産性」十一月号に掲載したので、ここでは繰返さず、会見の顛末のみ記したのである)。

辞去するにあたって、記念のための写真撮影を乞い、私のカメラを永井書記官に手渡した。大統領と向い合つて会話のポーズをとろうとしたとき、突然に大統領がインドネシア

語で問いかけてきた。「2かける2は、日本ではいくつですか?」意味はすぐわかったが、あまりに突然のことでもあり、殊に「日本では?」と謎をかけられたような妙な気持ちで、瞬間返事をためらったが、「やはり4でしょう」と答えると、大統領は大きな声で、「そうだ、その通り」と笑いながら右手をひるがへて私の方へつき出した。永井氏がなおカメラを向けてかまえているの意識して、「それで、板垣教授、水はドライかそれともウェットかね」と第二問。すかさず「もちろん、ウェットです。大統領」と答えたものの、ユーモアもウィットもない自分のとんまな返事にわれながらあきれていると、「それ、その通り」と大統領はいたずらっ子のように大笑いされた。パチパチ撮った笑いの場面の一部がこれである。「実はねえ、周恩来と一緒に写真を撮ったとき、あまりにくそまじめな顔をしていたので、同じ質問で笑わしてやったのだ。あとで自分の一生で一番よい笑顔が撮れたといつて礼状をよこしてくれましたよ。晴れやかな談笑のうち周恩来待遇を受けた私は、大統領の好意を謝しつつ、思い出深いムルデカ宮殿を後にした。(一橋大学教授)

海外に活躍する緑丘人
次頁に掲載させていただきます。まだ読んでいる緑丘人があると思いますのでお知らせ下さい。
大阪府東区豊後町四一
丸嘉機械(株)気付若山永太郎宛
この「緑丘」を海外へ送ってあげたいと思います。

U.S.A.

堀口 光夫 (S4)
145 West 57th Street
New York, N.Y. 10019
U.S.A.

横山 栄二 (S6)
Mitsubishi International Corporation,
277 Park Avenue,
New York, N.Y. 10017
U.S.A.

外山 源一郎 (S16前)
Mitsubishi International Corporation,
277 Park Avenue,
New York, N.Y. 10017
U.S.A.

田脇 由夫 (S16前)
Mitsui & Co., Ltd. New York Branch
200 Park Avenue,
New York, N.Y. 10017
U.S.A.

神山 善明 (S23)
Mitsubishi International Corporation, Los Angeles, Branch,
606 South Hill Street,
Los Angeles, California 90014
U.S.A.

宗原 忠 (S24)
Bank of Tokyo, Los Angeles Branch,
649 South Spring Street,
Los Angeles 14, California
U.S.A.

駒崎 一雄 (S25)
Bank of Tokyo, New York Branch,
100 Broadway,
New York 5, N.Y.
U.S.A.

ENGLAND

小玉 一昭 (S23)
Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltd. London Branch,
Bom Bells House,
Bread Street, (theapside) London,
E. C. 4,
England.

大野 晴史 (S36)
Mitsui & Co., Ltd. London Branch,
Second Floor, Bucklersburg House
83 Cannon Street, London E. C. 4
England.

AFRICA

石井 勉 (S17)
Liaison Representative of Mitsui & Co., Ltd.
in Nairobi Rooms
313/317, Uniafric House
Sodler Street, Nairobi,
Kenya.

AUSTRALIA

三浦 哲夫 (S13) 加留部 正哉 (S23)
Mitsui & Co., (Australia) Pty. Ltd.
F Floor, Guardian Assurance Bldg.
Cur Pitt and Hunter Streets, Sydney,
Australia

村田 全弘 (S25)
37 Lionard Street
Burwood Victoria
Austlalia

ARGENTIN

松浦 英雄 (S38)
Mitsui Bussan Argentin S. R. L.
Cordoba 657, Piso, Buenos Aires,
Argentina

BRAZIL

高橋 栄一 (S31)
Bank of Tokyo, Dio De Janeiro Branch
Rua Da Alfondega 43,
Rio De Janeiro
Brazil

ESPANA

武岸 嘉樹 (S35)
Liaison Representative of Mitsui & Co., Ltd.
in Madrid,
Avenida de Alberto, Alcocer 7,
3 Piso Derecha, Madrid-16,
España

BELGIUM

川道 尚文 (S31)
Bank of Tokyo, Brussle Branch,
10 Avenue Emile Bemot
Brussle

HONG KONG

木下 晴雄 (S11)
Hokkaido Dept.
Jetro Hong kong Office
Rm. 131. Man Yee Bldg.,
Gueen's Road, Central,
Hong Kong

THAILANT

柿本 正二 (S11)
The Sangkasi Thai Co., Lid.
Sakumbit
Highmag, Samudprakorn
Thailand

CAMBODIA

田辺 靖雄 (S35)
Maruka Machinery Co., Ltd, Phnom Penh
Branch
Messrs. Ets. MIEN HAI,
No. 128-129, Vithei Oknha Phlong,
PHNOM PENH (CAMBODIA)

KARACHI

星野 賢吉 (S18)
Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltd.
Karachi Branch, 3rd Floor. Bank Building,
Hahih Squore Bunder
Road Karachi-2, W. Pakiston

IRAQ

武都 清 (S23)
Liaison Office of Mitsui & Co., Ltd. in
Baghdad,
6th Floor, Commercial Bank Eldg.
New Bank Street, Baghdad
Iraq.

世界に広がる緑丘人

西 欧

英 国
小玉 一昭 (S23)
三菱商事(株)ロンドン支店
大野 晴史 (S36)
三井物産(株)ロンドン支店

ス ペ イ ン
武岡 嘉樹 (S35)
三井物産(株)マドリッド駐在員

ベ ル ギ ー
川道尚文 (S31)
東京銀行ブリュッセル支店

中 近 東
武都 清 (S23)
三井物産(株)バグダット駐在員

ア ジ ア

香 港
木下 晴雄 (S11)
北海道庁香港駐在員

タ イ
柿本 正二 (S11)

カンボジア
田辺 靖雄 (S35)
丸嘉機械(株)プノンペン駐在員

パキスタン
星野 賢吉 (S18)
三菱商事(株)カラチ支店

米 州

米 国
堀口 光夫 (S4) 農場経営
横山 栄二 (S6)
三菱商事(株)取締役副社長
外山源一郎 (S16)
米国三菱商事(株)機械部
田脇 由夫 (S16)
三井物産(株)ニューヨーク支店
神山 善明 (S23)
米国三菱商事(株)ロスアンゼルス支店
宗原 忠 (S24)
東京銀行ロスアンゼルス支店
駒崎 一雄 (S25)
東京銀行ニューヨーク支店

アフリカ
石井 勉 (S17)
三井物産(株)ナイロビ駐在員

オーストラリア
三浦 哲夫 (S13)
三井有限会社シドニー本社
加留部 正哉 (S23)
三井有限会社シドニー本社
村田 全弘 (S25)

アルゼンチン
松浦 英雄 (S38)
アルゼンチン三井物産有限会社

ブラジル
高橋 栄一 (S31)
東京銀行リオデジャネイロ支店

☆佐々木緑丘会理事長はこのたび勲二等旭日重光章を授与された。

☆神沢重治氏(大一一)は随筆集「冬扇」随筆第三集を自費出版。

☆斎藤進氏(昭一五)国体に出場すること連続一八回、ラケットを握って三十五年のキャリア、在学中は小樽高商の黄金時代をつくったが今なお母校のコートで後輩を指導している。(小樽市役所勤務)

☆学長選挙のやり直し期間中に小樽商大の「緑丘祭」が二十二日の前夜祭を飾ってファイヤーストームをくりひろげた。小樽公園グラウンドのストム跡の焼のこりが散乱、翌朝、これを見た管理者である小樽市教委社会教育課はカンカン。「公園はもう商大に貸さぬ」と忠告を受ける。

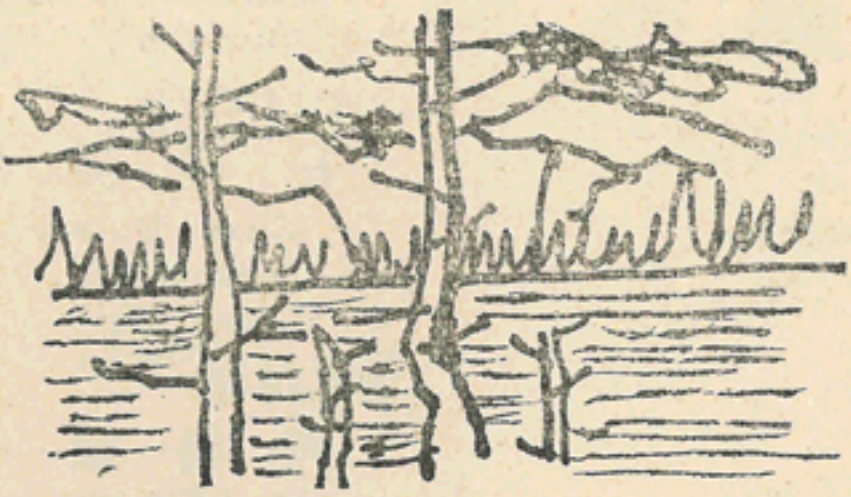
☆国体ボートで高張友三郎氏(昭二三)北海道選手団監督として参加、初の四連勝を遂げた。小樽経専時代は京都での第一回団体に整調として活躍、大学高専の部で見事優賞している。

☆「日韓審議・国籍問題を追う」とは朝日ジャーナル十一月十四日号の見出し。尼ヶ崎市大久保鹿式議長(大一一)名で内閣総理大臣、法務大臣あてに出された尼ヶ崎市の意見書が掲載される。

商工欄—税金

北条恒一

(昭一五 税政評論家)



交際費は

損金にできる

○：「まあ、たまにはいっぱいどうですか」と調子よく接待の誘いをかける元気のある中小企業者はまだ多い方で、お茶ひとつ出ないところさえある。ところが、この「たまにはいっぱい」であるが、営業上の交際費のための費用は、白色申告の個人経

営の場合を除き、経営上の損金にできる。ところが個人的色彩の濃い中小企業経営者は、このことを忘れてがちで、社長個人のポケット・マネーで処理することが多い。そのおかげで、どれだけよい税金を納めているか、どうか、バカにならない金額であろう。社長が報酬として月々もらうのも、おっかなびっくりもらいながら、そのなかで交際費になるものを自分で負担している金額が、かりに月二万円あったとすれば、一年では二十四万円である。これを全部経費とすれば、十万円以上の税金を払わないですむことになる。

○：自分の身をけずり、しかもよけに税金を払うなんてバカなことをしているから、中小企業の善良な経営者はなかなか自己資金の蓄積ができぬ。税金に対しては、とにかく「がめつく」ならなければ損だ。年間売上高に対して純利益の率が五％の会社とすれば、十万円の税金を節約することは、二百万円の売上高をふやした勘定になる。

・マネーで交際費を使って、会社の費用にしないかを分析してみると、およそ三つの型に分けられる。第一は領収証をもらえなかったからというものの、第二は経理の帳簿をつけている奥さんがこわいというふうな型、第三はズボラで使った金のゆくの記憶もなにもすぐなくしてしまいう型である。第三の型はあいきょうがあるが、救いようがない。第二の型は、これもどうもいだけない。「だまって、おれについてこい」と胸を張って請求書なり領収証を奥さんにさし出すことである。困るのは第一の型である。なんでもかんでも領収証がないと交際費として認められないと自分できめ込んでいるのである。ところが、この型が圧倒的に多い。税務署はその方が税収があがってよろこばしい限りであるが、幸か不幸か、日本の税法はどこを捜しても、領収証がなければ交際費と認めないと規定していない。外国では、ある限度以上は領収証がないと認めないと規定している国もある。といって、なんでもかんでも領収証がなくともかまわないというわけにはいかない。ともあれ、納税者はこういうことに、もっと勇気を持ってほしい。税務署のために商売をやっているわけじゃないのだ。

(九月六日)

親会社への

リベート

○：中小企業の経営者にとって頭の痛い問題のひとつに「リベート」が

ある。なんらかの形で親会社に従属していると、その親会社に対する売上高のうちから、半強制的にリベートをとられる。この被害が最もひどいのは、建設会社の下請業者だが、そればかりではない。数日前、広島県の倉橋町へいったところ、零細な機帆船業者が荷主にリベートを払わないと積み荷を回してもらえないという実情を聞かされた。建設業者でも全部が全部というわけではない。最もひどいのは世界的に名のおった某社と某社だとのウワサも聞いている。リベートを出すのは仕方がないと下請けの中小企業者はあきらめきれないのは、ムリして払ったリベートに対してまた税金をとられるという現実である。仮りに年間百万円のリベートを払ったとする。その支払い先はどうしても税務署にいかない、というときにその百万円についてまた国税、地方税合算して五十万円近くの税金を払ったとすればなんと下請業者は百五十万円の現金支出になるではないか。しかもその親会社からの支払いが長期の手形ときたら、泣くにも泣けないのが下請業者の現実の姿である。

○：このリベートを会社が支出するときに、ふたつの形態がある。ひとつは「交際費」とか「接待交際費」として会計処理をしている場合、他の方法は「材料費」とか「外注労務費」を増しして、その水増し分をリベートに回すやり方である。このどちらにも共通していることは、リベートを献上した相手方から、たしかにいたたきましたという領収証をもらえないことである。そのために

税務署との間に紛争が起るのである。さて、ここで前の「交際費」の費目で支出を処理した場合と「材料費」で処理した場合とで、税務署がどうしても認めないとき、どちらが納税者に有利であるかというところ、それは前者である。

○：なぜならば、前者の場合は「交際費」の否認だけで済むが、後者の場合には、実費はリベートであるのに、材料費の経費を架空に計上したというところで、重加算税(申告済み)の場合にはふえた税金の三〇％を課税される原因になるからである。しかし、現実には支出されている場合は最終的な更正の責任は税務署長にあるのだから、とことんまでその真実性を陳述し、なんとか認めてもらうように努力するのが経営者のとるべき態度である。とられるばかりが能ではない。(九月二十日)

庶民にこわい

贈与税

○：先日の毎日新聞朝刊は、大蔵省系特権官僚群が、国有財産をどのようにうまく手に入れていくかを報じていた。調査にたいへんな努力をされたものであろうが、敬服に値する報道で「山賊の山分け」と酷評している評論家もある。庶民は、自分の家を息子の名義にしただけでもたいへんな税金がかかる。自分の土地に息子に家を建てさせても借地権の問題が起る。自分の会社をゆくゆくは息子に譲らなければならぬからと、株式を息子に譲ったとしても税

金からまわってくる。財産が動けば必ず税金がついて回るものだと覚悟していなければならぬのである。○：こわいのは「贈与税」で、これは天下の悪税とさえいわれている。基礎控除が四十万円しかなく、それを越えれば税金を払わねばならない。Aさんは郊外に土地を百坪持っていた。遊ばせておくのはもったいないからと、息子に好きなようにしろとくれてやった。二十年も前に買った土地で、登記価格はいくらでも平然としていた。ところが息子が税務署から呼び出しがきた。びっくりしていつてみると、税務署の評価では坪五万円だという。そうすると全部で五百万円の贈与を受けたことになる。五百万円から基礎控除四十万円を差し引き、四百六十万円が国税対象になり、税金はなんと百八十五万円になると聞かされ、息子はへたへたとなつてしまったという。相続税(贈与税をふくめて)の評価額は、土地に関する限り登記価格によらず、固定資産税の課税標準価格にもよらず、独自の評価をしているから、ほとんど毎年違うのである。実際に売買される。いわゆる評価よりは安い、固定資産税の課税標準額はより高いのが通例である。

たときの株価と比例をとってみたりして算定するから、ときに五百円のものも千円になったり、二千円になったりすることもある。そうなることもでも贈与税がからんでくる。昭和四十年分は来年申告することになるが、うっかり名義をかえていて、とんだ税金がかかってくる可能性があるから、いまのうちに考えておく必要がある。(十月四日)

不合理な

税制改めよ

○：新聞は連日税金に関する社説や報道でにぎやかである。これは四十年度の税制の基本構想が、ここ一、二月の間に確定されるからである。来年度こそは、このような減税をしてもらいたいと要求する業界や団体は、あらゆる手段を講じて、それを改正案に盛り込んでもらおうと運動している。

○：四十年度の税制改正に際して、この運動でもっともたくましかったのは証券業界だった。そして配当所得について源泉徴収制度という戦果をあげた。これは、はっきりした分離課税である。

○：昨秋、税制調査会は「利子所得の分離課税」にさえ反対の意向を表明したにもかかわらず、政府はそのような意向を踏みにじり、大変な逆コースにいつてしまったのだ。利子所得の分離課税はそのまま、そのうへ配当所得まで分離課税できることにしたのである。配当所得の分離課税は、外国ではイタリアに例がある

ある。なんらかの形で親会社に従属していると、その親会社に対する売上高のうちから、半強制的にリベートをとられる。この被害が最もひどいのは、建設会社の下請業者だが、そればかりではない。数日前、広島県の倉橋町へいったところ、零細な機帆船業者が荷主にリベートを払わないと積み荷を回してもらえないという実情を聞かされた。建設業者でも全部が全部というわけではない。最もひどいのは世界的に名のおった某社と某社だとのウワサも聞いている。リベートを出すのは仕方がないと下請けの中小企業者はあきらめきれないのは、ムリして払ったリベートに対してまた税金をとられるという現実である。仮りに年間百万円のリベートを払ったとする。その支払い先はどうしても税務署にいかない、というときにその百万円についてまた国税、地方税合算して五十万円近くの税金を払ったとすればなんと下請業者は百五十万円の現金支出になるではないか。しかもその親会社からの支払いが長期の手形ときたら、泣くにも泣けないのが下請業者の現実の姿である。

○：このリベートを会社が支出するときに、ふたつの形態がある。ひとつは「交際費」とか「接待交際費」として会計処理をしている場合、他の方法は「材料費」とか「外注労務費」を増しして、その水増し分をリベートに回すやり方である。このどちらにも共通していることは、リベートを献上した相手方から、たしかにいたたきましたという領収証をもらえないことである。そのために

○：また一方、昭和九十一一年の標準世帯の課税最低限は千八百七十五円だった。これを三十九年の消費物価指数で換算すると、八十一万四千円である。それなのに三十九年度分の課税最低限は四十七万一千円であり、四十年年度分は五十六万四千円である。四十年年度の所得税の収入予算は九千八百九十億円で、そのうちの八五・八％は給与所得者が納めるのである。羊のようにおとなしい給料生活者は黙々として税金を天引きされ、不満を押し殺しているばかりでよいのだろうか。課税最低限の大幅な引上げが消費意欲の刺激になり、不況打開の一石にもなることと思いをさせて、証券業界が成功したように、所得税大減税のために一致団結して、猛運動をやってみたらどうだろうか。(十月十八日)

石ブームと私

室谷 賢治郎 (元教授)

わが国では、昨今「石ブーム」の状況が見られ、東京でも関西でも各デパートには必ずと言ってよい位に、銘石の売場が開設されている。北海道の千歳空港などには、石狩河畔から採取される神威古潭石が、旅客の足を留めさせている。このようにことについて、私に随想を書いて欲しいというのが、全国版「緑丘」編集者墓目英三君の注文である。実は、私は一昨年の秋から、現在小樽の十坪ばかりの庭に、石を大小約五十、専門の庭師に配置させ中に池を掘らせ梅・つつじ・いたや・ぼら等を植え込み、名付けて洗心園と呼んで楽しんでいたのである。この石は、神威石でなく、北海道南部の日高の沙流川流域から齎された特殊の宝である。石の色は、神威石の黒光りしているのに対し、碧・朱・灰白・濃翠等多種で、概ね横に二、三条の白い筋が雲のたなびく如く走っている。庭師は昭和の初期に天狗山麓の二楽園——戦後小樽市の管理に移されて「もがみ公園」と改称された——の造成に当たった、この道にかけてのベテランを依頼したので、資材も労力も完璧と言って宜い。この古稀の齢を既に超えた庭師の記憶の薄れない前にと、私はその所持する数葉の少々赤茶けた二楽園造成中のスナップ写真を携帯させて、小樽市史編纂室の鈴木伝氏——戦前は小樽新聞記者として緑丘学園へ屢たね

取りに来て、ある時など私と中野清一教授とが教官室で養命酒の効能について合槌を打っていたのを、早速翌日の紙面ゴシップ欄に「さては教授は養命酒本舗のまわし者か」と結び、その記事から本場に本舗が私に一纏寄贈して来るという一幕もあった。——に紹介し、対談筆録させる機会を、市長秘書岩田博吉君——昭和三十年緑丘短大第一回卒業生——につくって貰ったことさえある。

私はいま私なりの石の庭園に夢中になっているのである。雨の日も風の日も、夙朝未明に寝床を抜け出して庭に立つ。日高石と普通の飛び石とに囲まれた小さな池は湛えた水を常に静かに保ちながら澄み切っている。「文吾梅」の枝には、早くも二羽の雀がチチと鳴き交し、梢の間を旋回して見せる。私はやおら池の水を柄杓で酌んで、前面の突起した不動岩に撒りかける。シャーツという音が飛沫と共に、私の睡眼を覚ましてくれる。柄杓の水が多彩な日高石にかかると、私の耳目は益々聰となり明となり、心は洗はれて行く。洗心園は私の陋屋から歩いて八十歩ほどの洗心橋を交転橋するものと見られたくない。黎明に自己の姿、世間の相を潜心凝視したのである。家の前の通り——松風通という——の低い石垣に垂げた小さな板に洗心園と雄渾な筆蹟で墨書きしてくれたのは、緑丘学園庶務課の名筆西尾正一君——一昨年の毎日新聞社主催全国書道大会に第一位の栄冠を与えられた——のである。

私が石に凝っているのを見て、緑

丘会事務局長の中島与市さんは「週刊読売」のある号に、石に対する趣味をもつのは人生の終着駅に近い人することだといった趣旨の記事やグラビヤの掲載してあるのを教へてくれた。私は微笑しながら、それが緑丘学園を定年退職した私にとっても当て嵌まることを卒直に認めると同時に、石の味の分ることが無性に嬉しいのである。花も美しい。草も佳い。しかし、草花には咲いて潤む恨が残る。何万年の昔から、否、地球生成のその時から烈火を凝縮し激流に浸蝕されつつ、無辺から無辺へ永劫に存在する石こそ、永遠を慕ふ人間の安住して賞翫し得るものでないだろうか。石の大小、形状、色彩、硬度——これを様々に排列して打水する瞬間、実に命無しと見ゆる石に魂の宿りを感じせずには居られない。石を無機物扱ひする勿れ、石にも雄雄の別が見られると敢て言ひたいのである。

石ブームが全国を風靡しているところから、石の商品的価値が一箇年で十倍に跳ね上がったことは真に驚嘆に値する。石に対する需給関係が高値を呼ぶのは、経済の原則として異とするに足りないかも知れないが、近來の傾向は少々狂気の沙汰としか受取れない。佐渡の相川の五色石を東京駅地下の売店で横三十センチ、高さ十センチ大のもの十五万円と正札が附いているのを去る七月に目撃した。一万五千円の誤りでは決してない。北海道帯広の十勝川温泉の旅館の土産物売場には卵大の黒い十勝石三箇を百円で売っている。これは地元の小学校児童の稼ぎによると聞

いた。孰れにせよ、石は高価となるが故に賞せられるのではない。見る人の心々に訴へて面白いものほどこまでも面白いのである。石ブームを商人の悪計に乗せては断じてならない。「家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云う、狭くして陋なり」と。家陋なりと雖も、膝を容る可く、庭狭きも碧空仰ぐ可く、歩いて永遠を思うに足る。神の月日は此処にも照り、四季も来り見舞ひ、風雨雪霰かはるがはる到りて興浅からず。……静かに観ずれば、宇宙の富はほとんど三坪の庭に溢るゝを覚ゆるなり」と、徳富蘆花は「自然と人生」の中で記し、私は中学生時代に、この文集をこよなく愛誦したものである。家を二十坪に改め、庭を十坪に増せば、正しく私の石狂の心境は蘆花先生に通ずる。(一九六五・八・三一・札幌グリラ川むらにて稿丸札幌短大議長)

見晴台に登って

小田島 一雄 (昭一一)

花園公園の見晴台に、この前の日曜日久しぶりに子供をつれて行って見た。流石に港の街、小樽、斜陽都市といわれながら、大小の船舶が大分停泊していた、ブリム、フアンネル、ビー、アンド、オー、と云はれる外船の姿も見えた。夏の紺碧の海の色は、若干色あせて秋の色に変わっているが、増毛の山なみは、くっきり水平線の彼方に浮かんで見える

街なみは、それ程変わらないのが小樽の特徴？とも云ふのか、小樽築港の方から昔ながらに煙をはいてムカデのように長く尾を引く貨物列車が走ってくるのも目に入る。港の中をこざわしく小船が行き交っている。珍らしいと云えば、祝津の方の海にヨットの姿が浮んでいることだ。昔はヨットなど小樽では見られなかったような気がする。

ふりかへる山の手、矢張り一番先に目に入るのは母校の姿だ。学生会館が一きは映えて見える。白く這ひ上っている地獄坂、二十数年前の学生時代が、胸によみがへってくる。DOWN、TO、THE、CI TY、肩を組むで級友と街に出た日が、それにしても今年になって旧友二人が幽明境を異にした、一人は追分君、中学時代からの旧い交友だったが五月二十八日自動車事故で、もう一人は角谷君、数年前、東洋紡勤務の上野君と三人で、大阪出向の折、中食を共にした事が、再々度あったが、ゴルフの話に興じていた顔が、目に浮ぶ、墓目君の便りで胃ガんで他界した旨知ったが、自分の子供が丁度、学生時代の自分と同じ年頃になっている現実を思うと、いまさらのように自分の年輩を思い知らされる。そして同級生の死を思う時、より切実感がこみあげてくる。貧乏しながらも、P・T・Aの役員でかけ廻ったり、町内の役員をさせられたり、社会の為に少しでもと考へるようになった此所数年の事も思ひ合わせ、いまさらのように自分自身に苦笑を禁じ得ない、年のせいだ

昭和十一年卒業し、しばらく小樽をはなれていたが三十三年から父、母の住む小樽に、また帰り住み、すでに七年どうやら、此の自分も小樽に腰を据える事になった。啄木の詩友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て、妻としたしむを思い出しつゝ、両手に子供の手をひき公園を下る道、それでも不思議と自分の気持ちは満ち足りていた。

白秋の自画像

越崎 宗一 (大一一)

たしか昭和元年の八月だったかと思う。

僕がまだ新米のビール会社社員の頃、名声噴々たる詩人北原白秋先生が工場見学にいられたことがあった。普通の来客は事務所一階の応接室にお通しすることになっていたが有名人のばあいは、階上の大広間にご案内することになっていた。

前もって連絡があったので、白いティーブルクロスをかけるやら花瓶を飾りつけるやら、おつまみを用意するやら、新米社員はなかなか忙しい目にあつた。先に工場を見学された先生は、数人のとりまきを従えられ二階へ上がってこられた。赤ら顔の小肥りの見るからにエネルギーな風采だった。

早速生ビールのご接待というわけだったが、先生の飲みっ振りは実に見事だった。工場見学は表向きは理由で、敵は本能寺であつたらしい。ところが接待側も心得たもの、この

チャンス逸すべからずとばかり、一筆頭おうと十数枚の金箔を散りばめた上等色紙を用意し、硯箱には銘墨をすつてうやうやしく持ち出した。大分ご醜酌の先生には、何の屈託もなく気嫌よく筆をとり、次から次へとさし出す色紙にサラサラと短歌を認められた。新米社員の僕は遠慮勝ちに後の方に控えていたが、色紙にあまりがあつたので最後に罷り出した。

先生はもう最後というので気がゆるんだのか、大分酔が廻つたのか、サラサラと歌を書きかけて書き損じ、「チエツ」

と舌うちして、斜めにパツ天を引いてしまった。これが最後の一枚でどうすることも出来ない。僕の顔がいかに残念そうにみえたに違いない。すると先生は、その色紙をくるりとひっくり返し、ペタペタと筆をなすりつけたかと思うと、たちまち先生の自画像をものされた。じつに鮮やかな描きっ振りだった。しかも僕が先生の顔と比較するまでもなくじつによく似ており、先生のプロフィール(横顔)の感じそのままだった。

十数枚の短歌色紙は先輩達がそれぞれ持ち帰り、僕はこんなわけで歌の色紙を手に入れ損つたが、先生の自画像をいただいたのは僕一人であつたから、今日まで大切にこれを自慢して持っているという次第であ

技術革新に貢献する



丸嘉機械株式会社

大阪(本社)・東京・名古屋・岡山・広島・姫路・仙台

或る卒業生の死 角谷君のこと



松尾正路

のかと思った。
私とマチルドさんを大阪へよんでくれたとき、彼は戦場で敵弾にやられた墓目君のアゴの話をした。その夜、彼の花屋敷の自宅へ上野君と墓目君がやってきた。アルコールの進度につれて困らんの雰囲気が高まるさなかに、今度は墓目君自身がアゴの一件をおもしろく話した。角谷君の二人の美しい娘さんたちも、奥さんも、みんな腹をかかえんばかり笑った。それから、どんな話のはずみか、角谷君が私に注意した。「先生はボクが一年ずべったことを知らないんですか？」私はまったくそのことを知らなかった。すると十六才の娘さんが陽気な表情で叫んだ。「あら、お父さん落第したの！」それでまたみんな笑った。そのために父親



左から 上野、墓目、松尾先生、角谷、令嬢、マチルド (後向)

への信頼や尊敬がちつとも損われることのないこの家庭の暖かい、解放的な空気がうらやましました。その翌日、花屋敷の高台の朝は、満開の桜におおわれ、かがやいていた。小鳥が枝を飛び交うたび、満開の花の小枝が揺れた。一枚ガラスの部屋の窓から、それがよく見えた。角谷君が話したヒワかもしれない。ヒワにしては体柄が大きすぎると思っただけ。逆光線が羽毛の色がよくわからない。視角を変えて見たがだめだった。

奈良見物にでかけたとき、私は角谷君がポケットから裸の厚い札束を手づかみに握って出すのをたびたび見た。彼がそんなに金持であるはずはなかった。金持ぶる男でもなかった。彼は冬でもズボン下をはかなかった。彼は冬でも裸の礼束もそんな角谷式の自然のポーズだったと思う。学生時代、天狗山にスキーに行ったとき、カン切りで深く指を切った血だらけになった彼が顔色も変えず、その指を片方の手で握りながら山を滑り降りて行った姿を思い出した。裸の善意、率直な感動、陽気な冒険趣味、それはもう小樽高商時代の学生や卒業生を最後として終った記念碑的な人間像である。法隆寺の築地の瓦文様を丹念に点検しているペレエ帽の墓目画伯と、案内の計画だけをてきぱきと実行して無難作に歩いてゆく商會社事務角谷君との対照的な人物風景は、法隆寺見物の感動といっしょにくっついて離れなかった。

る。先生を案内してあげなさい」と彼は奥さんにいった。これが今も私の耳に残っている彼の最後の音声だった。崩れかけたアゴに対して、まだしっかり抵抗している彼の男性的な鼻稜を見て、私は、彼がこのまま死ぬようなことはあるまいと思っただけ。彼は築地の国立ガンセンターへ移り、そこで亡くなった。
私に宛てた彼の絶筆は、すでに字も乱れ、松尾を松井と書いていたりしていたが、それでいて、文脈は、彼の鼻稜のように、なにか豪気な直線が貫いていた。自分でからかっていたような希望と絶望をあしらった角谷風の文面だったが、その中に、私の肺を突き刺す言葉があった。
「この期におよんでも、テレビを見てみると、けっこう面白い。おかしなものだ。」
墓目君が京都、奈良見物の写真を念入りに記念アルバムにして送ってくれたのが、こんな記念になるうとは。あの高台の朝の、満開の桜の花が目に見えて死んだらうか。彼はゴルフの夢でも見て死んだらうか。それを願っている。
(小樽商大教授)



角谷氏 (左) マチルド先生

東京へ着いて会社へ電話をかける、病欠中という。自宅へ電話すると、奥さんのお話で駿河台の病院へ入院していることがわかった。すぐ出かけて病室のドアをあけると、ベッドに坐った角谷君の笑顔といっしょに、下アゴの崩れた形が強く私の目に映った。さすがに体力は消耗し、痩せていた。彼は静かに無慮に、自分の病状と病状を話した。再手術の必要があるかどうか診断をまわっていることだったがその話ぶりを聞いてみると、病気の主人が病気の話を速に速慮はいるまい、といっているようだった。私は、あのアゴの骨をもう一度削り取ってしまったらどんなことになる

異動

栄転

- 河信一郎 (昭一一) 佛オーエム製作所 名古屋市中村区泥江町一ノ二四 (中経ビル)
- 亀井尚一 (昭一八) 東京銀行 (神戸) トーアロード支店、支店長代理兼貸付課長 (神戸支店長代理)
- 神戸市生田区下山手通二丁目一五 電話一八六〇一
- 浅野 潔 (昭一一) 第一銀行大阪支店 (神戸長田支店)
- 大阪市東区高麗橋四丁目三五 中道良徳 (昭一一)
- 東北パルプ株式会社 (大阪事業部) 地 永楽ビル
- 山本俊雄 (昭一三) 東亜洗絨株式会社代表取締役
- 東京都中央区八重洲二丁目五番地 小山健児 (昭四)
- 太陽サービス株式会社取締役社長
- 大阪市北区富田町一〇富田ビル三階
- 柳沢孝栄 (昭一六) 第一銀行兵庫支店長 (大阪事務所次長)
- 安田正義 (昭九) 北海道拓殖銀行常務取締役 (本店営業部長)
- 浜井清一 (昭一一) 東和金属株式会社専務取締役 (三

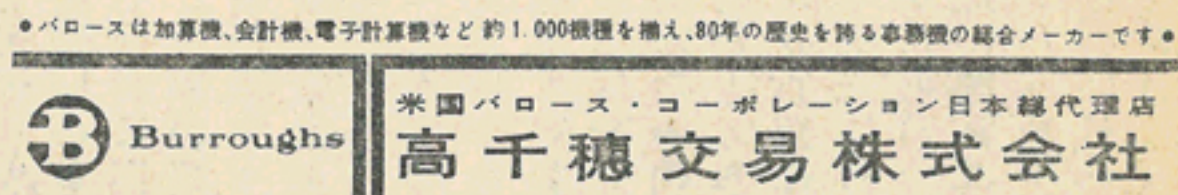
住所変更

- 越金属工業(株) 名古屋市中区和区桜山町三ノ五八
- 加藤一幸 (昭三六) 三井建設株式会社名古屋支店 (東京本社)
- 梅野弥太郎 (昭九) 北海道銀行大阪事務所長取締役
- 大沢一雄 (昭八) 埼玉銀行監査役
- 大島三郎 (昭一〇) 三井銀行京都支店長 (大阪西支店長)
- 京都市下京区四条通烏丸東入
- 谷 英純 (昭一四) 東京都世田谷区新町二丁目三八九 (電話四二〇一五八二九)
- 酒谷鉦五郎 (昭一六後) 函館市大町七番十五号
- 鈴木一雄 (昭五) 中華人民共和国 北京市南工字樓 友誼賓館第四四〇六号
- 柏村脩平 (大一一) 東京都杉並区下高井戸一ノ二三一
- 中道良徳 (昭一一) 東京都杉並区高円寺北四ノ八ノ四
- 小山健児 (昭四) 寝屋川市国松二二二
- 波方 清 (昭四) 札幌市南二十条西十二丁目 藻岩マンション七〇七号 電話六六四〇〇 (管理人室)
- 松橋忠光 (昭一九) 東京都北区赤羽台二丁目二番RD 一三〇三
- 五味 彰 (昭一〇) 札幌市南十一条西十丁目

会計機のエレクトロニクス時代をひらく...

新しく発表された、**シリーズ E 1000 電子会計機**をごらんください。

「未来の会計機は何か？」という質問に対するバロースの解答がこの電子会計機 (ローコスト・アカウントィング・コンピューター) なのです。



大阪・大阪市北区小橋通27 (大塚富田生命ビル) (312) 4973-1539-0039
東京・東京都千代田区新町1-7 (262) 3456-9-3406-9
支店・札幌 (名古屋) 広島 (高松) 福岡 (福岡) 仙台 (仙台) 札幌 (札幌) サポートセンター 全国50カ所

新製品 バロース E 1000 電子会計機

まんびつ五人集

次回

高橋 太田 柳川 北村 杉原

景則 (昭一二)
太平 (昭一五)
憲夫 (昭一三)
晋 (昭一九)
貢 (昭一六後)

親父株上昇

山下 政道
(高知支部)



緑丘卒業四〇年記念交歓会の感激さめやらぬ川上先輩より、大阪緑丘にも投稿を要請されたが、どうも幸福の手紙のように入巡を計画した張本人がいるらしいとお便りをいただいたが、こんどは私にも、お鉢がまわってきたのは驚いた。

緑丘をあとに社会生活へ飛びこんで以来、東京勤務を振出しに関東、九州、四国と雪とは、およそ縁の遠い地方を転々としているだけに、偶に訪れる「緑丘」を手にしては若き日の小樽の懐旧がよみがえる。校庭にそびえる夫婦ポプラの下でながめる海の見える小樽の街は、なかなか詩情豊かな街であったと思う先日、息子がみていた受験雑誌をのぞくと、

脈々と受けつがれている。緑丘健児の真価は古くから世に知られている。

と小樽商大の紹介がのつていた。親父たるもの鼻高々と若かりし学生時代の思い出を語ってやり、親父株上昇といったところである。

しかし、見逃してならないことは「緑丘会」が力強いバックアップを惜しまないことが、われわれの社会生活における絶対的な強身となっているのだと思う。

これを裏付けるかのように、私の遍歴する先々で活躍している同窓諸君に巡り逢い大変お世話になって感謝している。

なかでも大分県佐伯市(人口五万人程度)に転動した折、異国人絹パルプ会社へ着任挨拶に赴いたところ終戦以来消息がとだえていた横山君が勤務しており、二十四年振りの再会に喜び且奇遇に驚いた。

彼は工場建設以来相当苦勞したらしく、地元で顔が売れているのになさわしく頭髪も相当薄くなっていた。彼のバックアップのお蔭で、新顔の私は対外問題の処理に随分楽をさせてもらった。またよく雄大な別府コースで下手なゴルフに興じ、温泉に汗を流し、なるみ、モンクール

は小樽の太田太平君に小樽権繩をお願いいたします。
(昭一五) 株式会社小西商店取締役社長)

青島の緑丘人に想う

石田 平八
(大阪支部)



私はもう戦局も不利になりかけてからの三年間青島に勤務していましたが、もう己に二十年も経過し、当時の記憶も薄らぎかけたときに、緑丘先々号で岡本元次さんの青島の緑丘人を拝見し、深い感懐に浸ったことでした。恰も私も本欄執筆の指名を受けましたので、その感懐の一端を記したいと思います。

私は昭和十八年二月青島の或る酒造会社の支配人として赴任したのですが、一月程経った或る日、青島新報で緑丘会を開くから緑丘人よ集れとの広告が眼についた。当日勇躍出席して、岡本さんの書かれた、金森さん以下多数同窓の知己を得た次第であります。そのとき私が控室に寛ぐと間もなく恰幅の良い青年将校が入って来られた。よく見ると貨物廠の柳川中尉である。柳川中尉は当時貨物廠の調達課長としてビールや酒の軍納入の元締であつて、ビール会社や酒造会社では一目も二目も置いていた人である。しかも、私は何日前に担当者の手違いで軍納サイダ

行路

川上 貞光
(香川支部)



七生どころか二生ときえも思ったことはない。その尊い人生を単に酔生夢死で終つてよいものかとは人と言う。後の世まで名を残すような生き方固より領ける

一を無検査のまま、前線に送り出してしまつたという嫌で始末書を提出して散々頭を下げて来た、その人である。どうも、これにはお互に吃驚してしまい、やああなたも同窓でしかたというようなことで、爾来大変心易くして頂き、仕事のことでも大変お世話になった次第であります。この時程、同窓の有り難さを感じたことはありません。同氏もお元気で活躍の由、同期の若山君から伺つておりますが、次回は、その柳川憲夫さん(昭十三)に苦勞話でも承りたいものであります。
(昭二サツポロビール大阪支店長)

学校で教えない技術

対北大交歓会おこぼればなし
山内 孝
(大阪支部)



他校OBの方々と交歓を、定期的にやっている学校は全国に少いであろう。まして緑丘会大阪支部が、現在北大関西支部との間に行っている交歓懇親会、および余興対抗戦というやうな形は、極めて稀少ではないかと考える。その会合の有様は、それぞれ、本誌に詳報されている通りであつて、この種の行事についての意義などを、深くとり上げて考えるだけども、色々問題はつきないものがある。しかし、今日の私の課題は、漫筆

が、そう堅苦しい目標を立てて歩まなくても、よきそうに思つて「人生到處有青山」を己が都合のよいように取り込んで悠々自適の境地に在るのが、この頃の私である。余りに現実の社会が多岐多様に亘り、一筋道でないことに突き当たり、これから逃避したい気持ちになつたとも言える。

余生と呼ばれる生活に入ると人生の表街道に野心を燃やすなどと思つても日暮れて道の遠いのを嘆ずる位のものである。一方では国鉄新幹線を走れば、大阪と東京の間も往時の東海道藤栗毛の詩情はすっかり消え去り遠距離感もなくつて、文明の進歩に随喜の涙を流している。他方では、この文明に反逆するかのようには保健体育の強化宣伝のお蔭で延びた平均寿命線を運よく突破出来ても横合いから、この頃はやりの老人病が襲い寄つて来かねない物騒さである。うっかりわき目もふらずに前進していると、はたと行路に行き詰り後悔する日の無きことを保し難い気がする。そうだからと言つて、猛暑凌ぎに否秋の夜長に囲碁に打ち興じて得々としている自分を弁明する気持はない。ただ中学時代から連綿として45年余の長きに亘り、鳥鷲の戦に余暇さえあれば、借し気なく、こ

リレー」なのであるから、この線に沿つて、この会合にまつわる、軽いおこぼれ談義を書いて見たいと思うのである。

それは、昨年催された第一回の合同懇親会における所感の一つである。当日の会は、初めての催しとして、当然の事ながら、両校メンバーの自己紹介から始まつたのである。流石に、学校を出てからの社会経験の豊富な人々だけに、それぞれ、ユーモアに彩られ、和気あいあい、爆笑と拍手の中に、先づ北大側の自己紹介が終つた。

次いで、わが緑丘会の番である。末席に座して、大先輩諸氏の自己紹介を聴くことは、その殆どの方々を、よく知つている小生だけに、成程、あゝという紹介のやり方、自己を知らせる技術というものがあつたのだなと感得する事が多く、誠に意義深く、拝聴した事であつた。ところで、その内に、一種異つた感じが、非常に微妙な雰囲気ではあるが醸し出されている事に気がついた。

それは、緑丘側の自己紹介の内容には、北大側のそれと異つた。一つの類型のやうなものがある、といふ事であつた。

つまり、わがチームの諸賢は、自分について語る、という無限に近い材料のなから、それを短く省略して、その代りに、相手方にポイントを合わせた話を、ほとんどの人がしているのであつた。或る場合は「私は北大の方で、在学中に、このやうな競技を行なつて見事に勝つた(或

れに没入して来た甚歴を持ちながら依然として段付にもなれなくても、今日においては下手の横好きでやり通したことが私の余生を、この上ない楽しいものにしてくれている。

人生とは自分の幸福を最大限に追求することであり、引いては社会を明るくものにするのでありたいという観方に立つて、自ら満足していることを言いたかつたのである。段付でないことが却つて幸せしてと言つてよいか、上手にも下手にも気安に相手になれるし、また自分から庶民的に出れば若輩、同輩、先輩の区別なく誰とでも我を忘れて打ち興ずる。多くの勝負事について廻る、いわゆる附きの有無とか僥倖など、他方に頼むされない全く自らの心・技・体の調整がうまく出来ているか否に懸つているから、自分の修行の足らないのを責めこそすれ、人を恨みに思つたり、嫉んだり、などの不快が介在する余地がない。ただ自己を反省して新しい闘志を養うことが残されるのみである。ことに囲碁は頭の練成になるので、兎角陥り勝ちな老化の防止に役立つと言える。囲碁に打ち興じて、没我の境に参味できる間はまだまだ頭の働きのしつかりして証左だと思つている。

以上数かずの功徳を述べ、囲碁を礼讃したのであるが、囲碁党に同好の士が一人でも多く出て楽しかるべき余生を多様なものにせられるようお勧めしたい。

大阪の松村義公君よりの「貞光一家言」の要求に応えると共に、次回

は負けた)のでありまして……」となり、また「……というようにな訳で、私は北大OB〇〇氏の会社の製品と浅からざる関係を持つていたのではありません」というように、いわば北大側の関心を引きつけて、飽かさないのである。

これは、一つには、本日の主催者が緑丘であるという事による来賓待遇の潜在意識が、多少とも働いているからだと、と解してもよいであろう。しかし、それよりも、矢張り小樽で学んだ商業学、社会科学、また実社会において、身を以て体得された経験の数々が、このような形となつて現れた、と推理する方が当を得ているのではあるまいか。

なぜならば、北大側の方々の話しのなかに共通するものは、専ら、和やかに自分を相手に伝えたい、という感じのものであつて、小樽側との結びつきに言及された方は少かつた、と小生には思われたのである。

端的な表現で分類するならば、技術、研究色のそれと、商業色の差異であるといつてもよいであろう。

その何れが優であり劣である、などという詮索は、この場合全く必要がない。ただ、私は、この会合の成功と交歓の機会の永続性を信じてこゝができたのである。

事実、当日の会は、緑丘会一色の会とは、また異つた雰囲気で、極めて面白く終始した。そして、北大側主催の第二回交歓会の後に、既報通り、珍貴無類の余興対抗戦までが華々しく挙行されたことであつた。

その選手宣誓文(実は私が創作したのであるが)のなかで、私は次のように表現した。……私達は、学校では絶対に習わなかつた技術をもつて、相手を笑い倒すまで、堂々とケツパルことを誓います……云々。しかし、今日では、私は、学校で習つたことと、絶対に関係のない技術が身につけている、などという事は、あり得ないのではないかと、考へてゐる。前述の自己紹介にして、そうである如く、私はいまさらのよう、小樽で過した影響の大きさをつくづくと感得してゐるのである。次回は杉原貢君(昭一六後)にお願いいたします。

(昭一六後 東洋建設勤務)

小樽高商の入学試験

赤津 俊樹

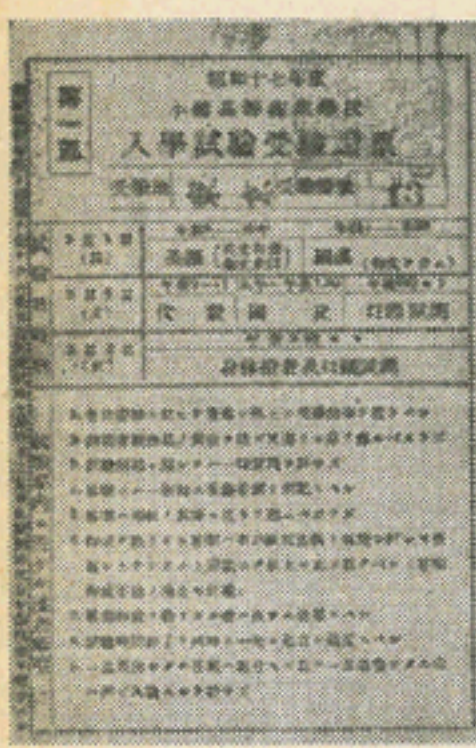
(東京支部)

緑丘人にとつて小樽と最初のつながりは、誰しも入学試験のはずであつた。昭和十七年度の受験票が、あの戦乱にもめげず、いまでも私の手許で昔日の思い出を物語つてゐる。お目にかけて漫画のピンチヒッターの責めを果たした。

受験票に曰く(原文は横書き片仮名)

試験場内における注意事項

1各自番号に従ひて着席し机上に受験証写を置くべし



- 2 談話音読物品の貸与を禁ず、また妄りに席を離るべからず
 - 3 試験問題に關しては一切質問を許さず
 - 4 答案には一枚毎に受験番号を明記すべし
 - 5 答案は用紙の裏面に亘りて認むべからず
 - 6 作成を終りたる答案は不用紙反古紙と區別し、何れも裏返しとなしたる上面紙にて机上に止め置くべし(答案作成不能の場合も同様)
 - 7 答案作成を終りたる者は直ちに退場すべし
 - 8 試験時間終了と同時に一斉に起立し退場すべし
 - 9 一旦差出したる答案は返付せず、一旦退場したる者は再び入場するを許さず
- △ 二十余年を経た今日でも試験場の

試験日割		午前九時—正午		午後一時—三時	
三月一日	英語(英文和訳和文英訳)	国漢(作文を含む)	国	史	口頭試験
三月二日	午前九時—十一時	正午—午後二時	代	数	身体検査及び口頭試験
三月三日					

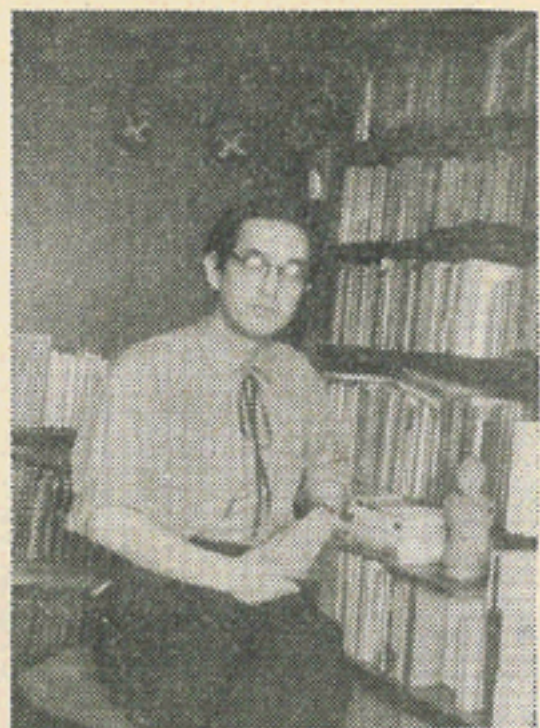
情景、入学式のこと、従つて雪の小樽、歓迎ストーム等鮮かな記憶がよみがえつて来る。
次は北村普君におねがいする。
(昭一九 シオノギ製菓(計算課))

(まんびつ執筆者)

- (客員) 松尾教授
- (大三) 高橋徹男、下吹越栄吉
- (大四) 八木康之助
- (大六) 伊東小四郎
- (大八) 戸井正三、大野純一、三好長次、増井得三、谷本朋次、郡菊之助、西村百太郎、松本義一、大山謙吉、広岡一男、福田誠、藤居元三
- (大九) 菅谷重平、奥村義信、小島憲市、奥田直
- (大一) 宮地邦介、小橋庸三、杉山昌作、神沢重治、梶川亨司、功刀素重
- (大二) 田中弥三郎、塩谷精一郎、大久保鹿式、大井義郎、渡辺一夫、小河成美、池田繁正、田中実、穴釜升夫、玉井武、日南田美文、佐藤信雄、若林周五郎
- (大三) 古関周蔵
- (大一四) 畑信太郎、片岡亮一、小武海鉄郎、松原治郎、森下弘

僕の書齋

小梁川 重彦(昭10)
(札幌市立図書館長)



親父が建てた古い家の六畳間を学生時代から占拠して、狭さをかこつていたが、さて自分が家を建てる段になつて見ると、家族どものご注文に応じて間取りをきめたら、ヤツパリ書齋は六畳になつてしまつた。二間六畳の書棚を壁一ぱいにとつて、更に本箱を四つ入れ、机とソファ・

ベッドを入れると手一杯。押入の中に七段の棚を急造してハミ出した本を収容しても、まだ本箱が廊下にハミ出す始末である。だが自分の選んだ本は可愛いので処分する気にならな。古本屋の主人が時々水を向けてくる。「ご用済みの相当おありでしょう」とか何とかニヤニヤしてゐる。

たまには小樽まで出かけて、昔なじみの第二大通の文屋のオヤジを訪れてみたりするので、本はシリシリと殖えるばかり。押入の裏をぬいて納戸部屋迄延長を考えたりする。

図書館屋のクセに?と不思議がられるかもしれないが、やはり本を愛するには、自分で持つのが一番よいらしい。概算三千冊、四分の一は北海道関係の資料的なもの、さらに四分の一は詩集詩論。それに次いで和洋の文学関係、美術書、そして文化史もの。若干の初版本や署名本などが本箱を一つ占めてゐる。

本命だつた経済学関係は、私自身がそうであるように書棚の一角に少々遠慮した姿で納まつてゐる。そのほかに、この書齋は博物館的な相も持つてゐる。土器、石斧、石鏃からアイヌ刀、耳輪、古地図、漁場の三平皿に明治の卓上ランプ、益子焼の茶瓶に、矢立、罎などが散在して歴史的雰囲気を作つてゐる。人間の生

活の痕跡がたまらなく良いからである。読んだり書いたり疲れた時、ステレオを鳴らして、こんな品々を眺めてゐるのは、時間を超越できてまことに良い気分になれるものである。

その意味では、この室は「書齋」という生活の一部分を支える場、ではなくて、此処の方が生活の核となる私の「巢」なのかもしれない。私をとりまく巢が雑然としてゐるようし、雑学が積みこまれてゐるのだがこれらの有形無形のガラクタと取組んで、その中から自分の「生きた」ことを確認しようとするのは、まさに楽しい負担である。だから、私はまだまだ詩を書きつづけたいし、この道での新しい分野にも手をつけてみたいと考へて、バレーと詩の結合を実験的に試みてゐる。

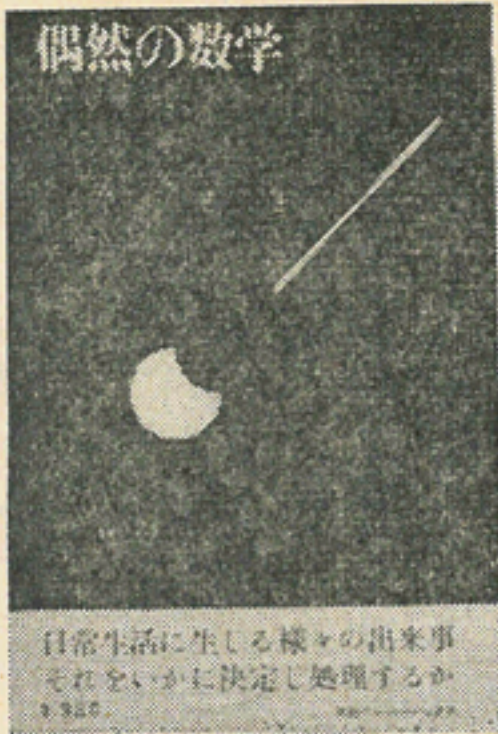
そんなアイデアや、イメージが造られるのが、こんなガラクタの中であるということに、私自身が奇妙さを感じてゐるといふのがホントのところである。

自薦他薦を問わずごさいせん下さいませようお願いします。
原稿用紙一六字(二行)でねがいます。

- 北村良吉、桐田鉄郎
- (大一五) 増田常次郎、中野清一、白木小一郎、近藤徳弥、津久井七雄、大平善梧、西野嘉一郎、竹内隆、吉田莊太郎、祐村脩平、松村義公
- (昭二) 黒羽秀夫、牧野吉男、岡田政治郎、堂城不二人、友沢和一郎、小貫武、手島恒二郎、山中晴雄、太田英治、広瀬久一
- (昭三) 佐竹繁寿、樋山三郎
- (昭四) 小山健児、湊静男、高橋一男、玉井英雄、宇山慶三
- (昭五) 池田啓助、井藤久也、吉田友記、北村大治郎、横井七之助
- (昭七) 八家要
- (昭八) 土岐秀雄、本間広松、小池三郎、高見美雄、会津幸雄
- (昭一〇) 篠崎万治郎、若月雅司、北村匡弘
- (昭一一) 浅野潔、土屋龍郎、木下春雄、三崎嘉郎、島崎保信、中尾弘、中道良徳、川原俊一、松井要吉、進藤彰、越崎清二、中木平三郎、丸山一郎、紫竹亞津視、秋葉隆一郎、墓目英三、本間誠一、鎌田正三、木村頼雄、小林啓作、角谷榮作、上野茂
- (昭一二) 内藤好生、皆川莊一、西谷作太郎、矢野正郎、宮内美雄、木内武之助、牧田恒雄、本間英作、森川正明、石川孝一、浅田厚、岡田保司、山村太兵衛、佐々木成彰、岡本元次、立石市郎、佐藤清治
- (昭一三) 江川裕一郎、若山永太郎、木村章三、山本俊雄、松ケ野寿夫、丸山弥、平木勇三、金垣英雄
- (昭一四) 伊原利勝、大沼誠治、

偶然の数学

武隅良一著



ビジネス活動を含めて、われわれの日常生活には数多くの偶然がつきまといまわっている。予測のむずかしさといふことも、そこに偶然の要素がいりこんでくるからにはかならない。しかし、偶然のなかにも、いろいろな法則性を見いだすことができる。よくいわれる古典的な例であるが、馬に蹴られて死亡した兵士の数というようなものでも、調べてみると、ちゃんとポアソン分布をなしているのである。

刊

「勘と科学とは決して矛盾するものではない。両者の提携こそ望まざるべきものであり、このことは、『偶然の数学』全体においてもあてはまるものである」と結ぶ。

ところどころ、「理由は省いておく」「説明省略」となっているのでヘソマガリの読者は、そこどころが知りたい、などというかも知れない。しかし、広大な「偶然の数学」をわずか二六六ページで紹介する試みであるから、そこまでは要求するほうが無理であろう。とはエグゼクティブの評である。

(著者は小樽商大教授)

小樽

史跡・旧跡と建造物

小樽に博物館のある事は今から十数年前に小樽を去った人々には判らぬと思う。

元日本郵船株式会社小樽支店(明跡)



治三十九年十月に竣工)跡を小樽市が引受けて博物館としたものである。この博物館長は松井勲氏(昭七)である。

- 一、桃内貝塚
- 一、張碓遺跡
- 一、鉄道零埋起点標
- 一、オタルナイ運上屋跡
- 一、オタルナイ役所跡
- 一、オタルナイ騒動跡
- 一、葛山屋敷跡
- 一、札幌本府開拓銭函仮役所跡
- 一、銭函通行

以上が史跡、旧跡であり、建築物と併せてこの八月、小樽市開基百年を記念し「小樽の史蹟旧跡と建造物」なる小誌(二十八ページ)を小樽市教育研究所と小樽市博物館が監修して発刊した。

小樽の史跡、旧跡並びに由緒ある古い建物についての写真集である。目次を紹介しよう。

- 一、手宮洞窟(国指定史跡)
- 一、忍路環状列石(国指定史跡)
- 一、地鎮山巨石記念物(道指定史跡)

小樽商大、にしん御殿、銀鱗荘、鉄道記念館など十二の小樽の古さを物語るのが収録されている。

処女出版

句集『掌の風景』

前田弘(昭三八)著

前田弘君は、句集『掌の風景』を二十五歳の誕生を迎えて記念出版した。「ぼくが生れてから二十五歳の歳月が流れた。これからの歳月をこ

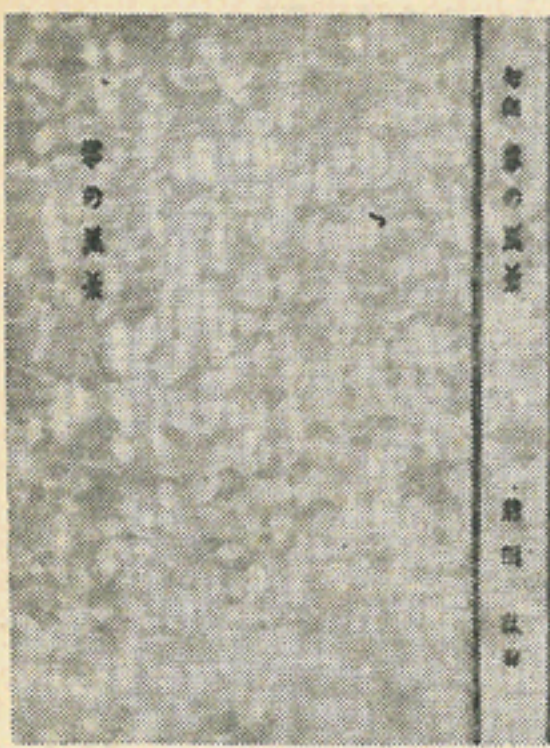
新

れからは記憶の泉として所有していきこう。

「掌の風景」というのは俳句を創るの時のつまずき、ぼくが北見市の東陵中学二年の頃になる。……」

美しい空 北見
羨 塚 小樽(小樽商大時代)
挽 歌 東京

「掌の風景」というのは俳句を創るようになってから、何年かの間に、ぼくの心の外と内の風景、というほどの意味である。これらの風景は、心の外側よりも、内側からの季節の変化によって色彩や明暗を与えられている。あるいは「掌の風景」は意識的に自転しようとして呻吟したばかりの青春の軌跡に狂い咲いたあだ花の温室なかもしれないという。



これを転期として、さらに一層の飛躍を期待する。

熊祭るカラフトアイヌ ハイヒール
葡萄狩りジェット機音は雲の中
月見草寮歌に動く喉仏
レクイエム聖なる蕩児梨喰らい

P・R誌

P・R誌の編集は企業夫々に特色があって面白い。銀行はピアノや建物のロインをねらい表向きはヨーロッパの風物や手芸の手ほどきからはじまって折紙の事まで女房や子供を楽しませるといふ有りふれた幼稚な手法を使うのもあれば、ズバリビールと昼日中封を切っては誘惑されそうなサッポロがある。特にカラー写真にいたってはP・R誌随一である。

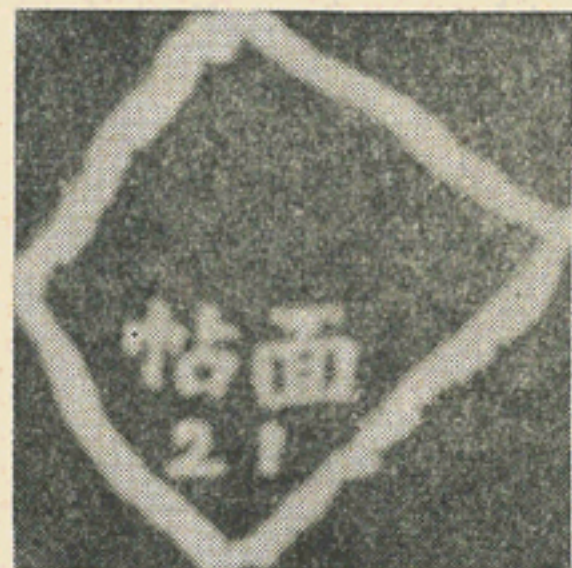


PHPというパンフレットがある豪華な執筆陣を毎号揃え、カットもよい、内容にいたっては心暖まる読み物、車中で、このパンフレットを読んでいる人を見ると、その家族の人柄についてゆかしさを感じる。P・R誌ではないという。



数日前「紅」というパンフレットが舞込んだ。新聞でこの紅がP・R誌らしからぬP・R誌である事が紹介されて予備知識をもっていたが執筆者に山内壮夫(彫刻家)三浦綾子(作家)坂本直行(画家)越崎宗一(郷土史家)川上澄生(版画家)などが参加して三〇頁たらずの紙面に楽しいカットをちりばめて面白く読ませる。(五十四号)

これが江別のミソ屋のP・R誌であった。大切に保管しているP・R誌に「帳面」がある。



封筒、表紙が毎号麻生三郎(主体美術)元自由美術会員のデザインで変わる。創刊号(三十三年)には船越好文氏(昭五)の美しい白馬岳大雪溪の写真が入り、夏山特集であったが、毎号特集を出していた。美術の秋、雪国、花、城、音楽、冬

山、ほりかわ、風、古典などで三十六年まで続けた。その後特に特集とろたわらず内容はかくれた風物、人物をはじめガラス絵や人形硯など珍品の写真を添えて詩集であったり、散文体の小品などが送り届けられる。二〇頁のうすいパンフレットである頒布送料共五〇円、季刊、十月号で二十二号になった。

稀覯本蒐集家には特に残して置きたいP・R誌であろう。はじめは印刷屋のP・R誌とは気が付かなかった。

(まんびつ執筆者)

- 北村幸、谷英純、沼田博、太田正勝、岩崎雄、河西辰男、沢村重一、石黒政夫、北条恒一、三浦正飛塚誠一、竹島篤二郎、金井勇、八木安、野村鉄太郎、福地貞雄、櫻村久好、尾崎哲平、沢井道成、櫻田鑽三、市橋宏一郎
- (昭一六) 相原正美、相田正
- (昭一六後) 中村平之助、小林芳美
- 松村克己
- (昭一七) 初谷真一、長尾昌弘、桑野泰次郎、阿部敬作、越智直行、山田光男
- (昭一八) 亀井尚一
- (昭一九) 高山博男、荻村茂雄
- (昭二二) 牧口富伍、福田和、服部奎吾、北野巧
- (昭二五) 我満博仁
- (昭二九) 古内一成
- (昭三〇) 石津洋三
- (昭三一) 小田島和夫
- (昭三五) 佐藤良雄、本前勝支明、長津行高、猪浦淳一
- (昭三六) 神田隆志

緑丘 余話

小樽商大の体質を改善した
前学長加茂儀一先生 丘を去る

任期満了で今般退任する加茂学長のニュースは全国の同窓生に大きなショックを与えた。三十三年就任以来、母校再建のため粉骨砕心、昼夜をわかつた東奔西走する姿は古い言葉ではあるが建武の中興ともいふべき誠意に尊い存在であった。

Kamo the Efficient を贈ったのは小林象三先生、ミッチー学長の愛称は山本一君(昭一三)当時神戸支部)であったが、母校の血液の交流

をはかつて新風を吹き込むことへの努力は全国同窓生がひとしく大きな期待を持って見守っていた。果せるかな全国大学が羨やむような人材を集め、伝統ある輝かしい過去を基底として一段と飛躍せしめた功績は大きい。

三十四年佐々木理事長に進言して全国的に募金運動を開始し、一億五千万円の基金を作り、学生会館の建築をはかった。電子計算機を入れて

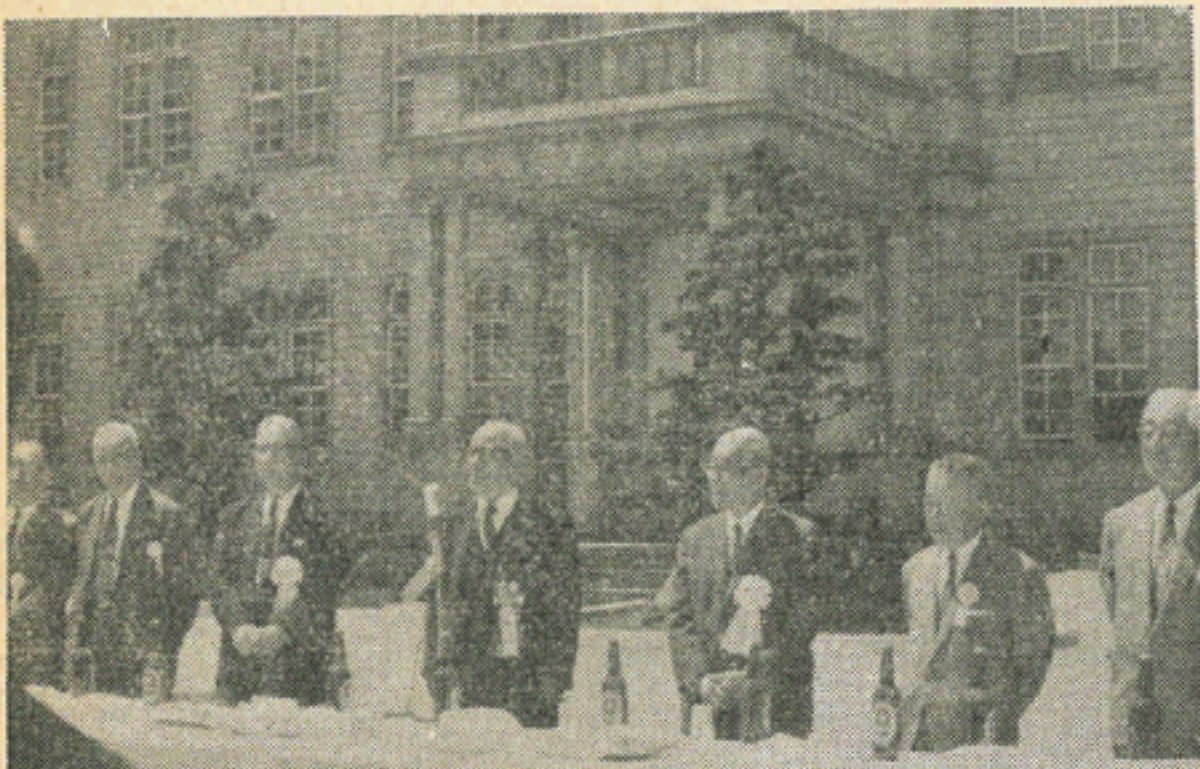
管理科学科を設け、外語教育の発展のためのラングエーヂラボトリーを設置、悪臭放つボロ寮をたたきつぶして精明寮を建設、学生のための運動施設、総合グラウンドの建設をはかるなど数々の功績は筆致に尽し難い。

優秀な教員を迎え落付いて研究を続けて貰うためにはこのボロ校舎では腰も落付かぬであろうとの配慮からは非暖房のある効率的な研究室の建設にあると建設計画をもって上京すること、数回に及ぶ。殆んど学長室の席の暖まることになかったと思

う。大学生活は教師と学生との人格的なふれあいがあると常に考えておら

れた先生は機会を求めて積極的に学生に手を差し延べた。ボロ校舎の面目を一新する努力と学生訓陶への努力は先生のモットーであった。然し如何せん辺境の地から上京しての陳情は飛行機の利用によって時間の短縮ははかられても、全てはそう簡単に解決せず、お役所相手の仕事には必要以上の時間を要したことは察するに余りある。それだけに留守中の教官に期待することも大きかったようだ。

母校五十周年を迎えたのは昭和三十六年七月である。この時すでに先生の頭の中には母校発展のための大いなる構想が練り上げられていた(次頁下段へ続く)



(中央・母校五十周年記念パーティーで)



(四〇年全国総会で―東京)



(名古屋同窓会で)



(京都同窓会で)

「緑丘」で知り
—ロンドンからも応募—



マ先生日本招待募金
目標をはるかに突破する

マッキンノン先生を日本へ招待する声が挙って四ヶ月、十月二十日現在で目標を遙かに突破する金額に達した。

東京支部扱 七六〇、二〇〇円
本部扱 五一三、二九五円
札幌支部扱 二五〇、〇〇〇円
合計 一、五二三、四九五円

マッキンノン先生は何時来日するのか、マッキンノン先生の来日の日程がきまり次第連絡たのむ。大阪の歓迎会には是非参加したいという高知やら新潟からの希望が続々入ってくる。東京支部に問合せたが、この交渉は大谷敏治氏(元教授)が担当しているとのこと。もっと積極的に交渉してはどうかとの声も聞く。『マッキンノン先生の現在のご健康にはさして問題ないよう洩れ承って

おりますが、サンフランシスコ市郊外パークレーの先生ご住宅が目下計

(二〇以上の申込者)

苦米地英俊	昭二〇	〇〇〇円	宮袋 虎雄	昭四	〇〇〇円
武智 鉦	昭一六	〇〇〇円	松川 一馬	昭一三	〇〇〇円
手島恒二郎	昭二	〇〇〇円	大木 弘基	昭五	〇〇〇円
田上 東福	昭一〇	〇〇〇円	栗原勇次郎	昭五	〇〇〇円
石本 芝郎	昭九	〇〇〇円	船越 好文	昭五	〇〇〇円
奥村 正美	昭一七	〇〇〇円	西野嘉一郎	昭一五	〇〇〇円
松本 義一	昭八	〇〇〇円	和島雄治郎	昭八	〇〇〇円
井上 巖	昭一一	〇〇〇円	進藤 孝二	昭一四	〇〇〇円
飯田清四郎	昭一五	〇〇〇円	山田 勇	昭五	〇〇〇円
高橋 亘	昭一一	〇〇〇円	武岡 嘉一	昭三	〇〇〇円
宮脇 音次	昭一一	〇〇〇円	佐藤 栄治	昭一四	〇〇〇円
石田 平八	昭二	〇〇〇円	山本己代次	昭一五	〇〇〇円
矢野 正康	昭一五	〇〇〇円	板垣 与一	昭四	〇〇〇円
本間 房二	昭七	〇〇〇円	四谷 宗義	昭一一	〇〇〇円
中尾 弘	昭一一	〇〇〇円	増田常次郎	昭一五	〇〇〇円
大和田正彦	昭一五	〇〇〇円	草野 義一	昭七	〇〇〇円
佐藤純一郎	昭三	〇〇〇円	太田 英治	昭二	〇〇〇円
河上 鎮男	昭一六	〇〇〇円	天野 雅司	昭一五	〇〇〇円
本間 広松	昭八	〇〇〇円	中野孝太郎	昭一一	〇〇〇円
水島 弘	昭八	〇〇〇円	吉岡 義二	昭九	〇〇〇円
宮内 美雄	昭一二	〇〇〇円			

画中の高速道路建設予定計画にかかり、その交渉が十一月中にある」と幹事からの連絡をいただいたが、是非速かな実現をお願いしたい。「緑丘」を見てマ先生の募金を知りロンドンの大野晴史氏は編集部宛に六ポンドの送金をしてきた。送金(六、〇八三円)本部へ転送。

とであろう。そしてその計画が、着々と進行の過程にあった。それが今である。

加茂学長の残された功績は大きい。今この「緑丘」の頁をめくって振り返る時、どの頁にも脈々と先生構想が息吹いている。学長の就任とこの「緑丘」の誕生がはからずも期を一にしている。加茂先生の残された歴史と同様この「緑丘」もまた輝きを増したいものである。学内行政に粉骨され、多大の功績を残された先生のご健康とご活躍をはるかに祈り申し上げます。

某月某日欄について

最終頁の某月某日は編集部の内幕を書いています。緑丘人に関係あることや文学、音楽、絵画など芸術に関係すること、今研究中のことなど日記風に書く方のため見本として恥をさらした次第。次の執筆者は名のりを挙げて下さい。

緑丘 綴じ込み表紙

希望者は二〇〇円お送り下さい。大阪市東区道修町三丁目 塩野義製薬株式会社 藪目英三宛

緑丘



緑丘人物譚

(12)

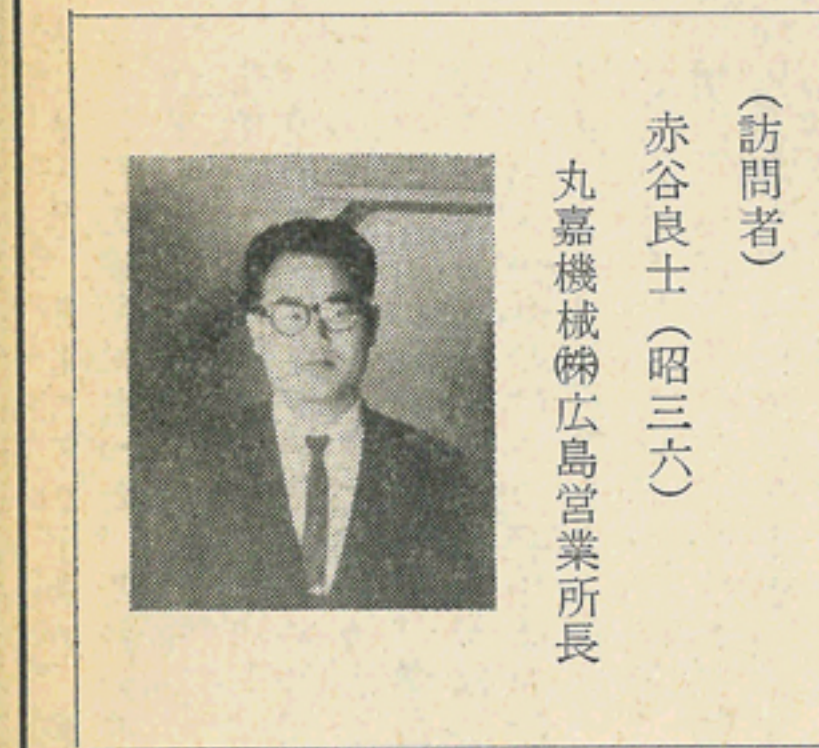


広島県経済農業協同組合 連合会 専務理事 緑丘会広島県支部長 友澤和一郎氏 (昭2)

友沢さんは、現在広島県経済農業協同組合連合会の専務理事さんで縦横の活躍をしておられる。農協連は各町村にある農協の上部団体で、その仕事は農産物販売事業と農業生産資材、消費資材の購買事業の二つに分かれており、その元締は全販連、全購連である。友沢さんのお仕事は、まさに多忙で、その生産対策、流通対策に日夜御奮闘中である。その御忙しいなかをおうかがいした。

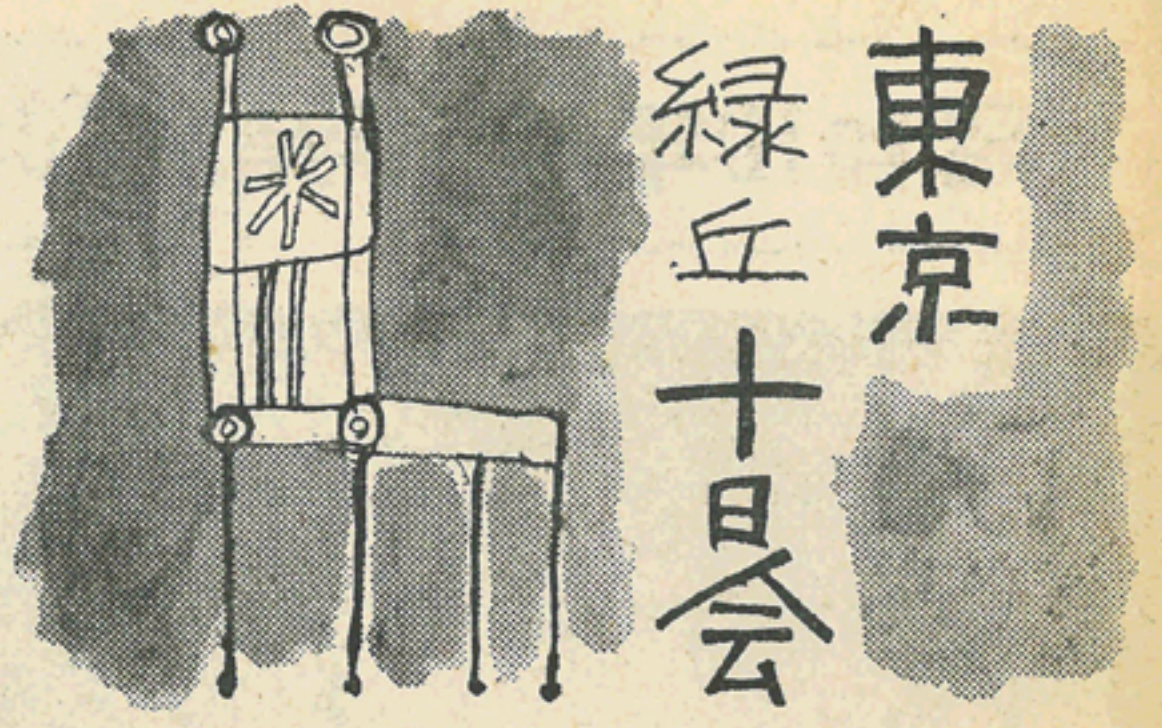
現在、日本の総人口に占める農業人口の割合は約二五・六％といわれているが、これも年々減少の方向を辿っている。その点からまずきりだしていただく。「農業人口が年々減っているのは諸外国と傾向を同じくしていること、そう悲観的な現象ではない。都会への人口集中は、重化学工業、サービス産業が、それだけ発達している証拠ですから国力の発展と考えてもよく、むしろ結構なことでしょう。但し、農業を棄ててしまおうわけにはゆかない。貿易の利益で食糧を外国から入れることも大切なことかも知れませんが自給自足はより大切なことです。平和の根源としての食糧の大切さを皆さんに知っていただきたいと思えますね。自給自足対策は今後の農業政策の、いや国策の根本問題といえるのではないかと考えます。」

「え、これも実は先ほどの自給自足対策と一緒に価格対策として考えねばならぬことなのです。価格対策とは即ち、流通構造の改革が必要なのです。いまのところ農村で、できた野菜は農協や業者の手を通して市場に選ばれて、そこで仲介人によって、小売に渡り、消費者という具合に中間で労費と経費を使います。直接わたされればいいのですが、それは無理ですから現在のところでは、スーパーマーケットあたりが農村から大量仕入れ、大量販売するようにすればいいと思うので



(訪問者) 赤谷良士 (昭三六) 丸嘉機械株式会社 丸島営業所長

日本では人手不足といいたがら人の浪費が、あちこちで随分みられます。人をいかにして使う工夫をもっともって考える必要があると思えますね。」



東京 緑丘十日会

一三八回 十月例会 時 九月十日 午後五時半 所 東京ヒルトンホテル

この日夕方から台風のため強風となり、昭和八年卒の当番幹事の方達が集り具合を大分心配して居られたが、幸い三十二名の参加者があり盛大に開会した。八木幹事の開会の挨拶の後、日本開発銀行理事経済学博士下村治氏の「当面の景気対策に付て」という題で、お話を承った。その要旨は、現在の経済界の状況は決して上向きではなく横ばい、むしろ底をついたと見る可きであり、七月の政府の施策に依って一般的に信用不安が稍薄ら

いだという心理的なものが多く、将来に期待が持てるといったところと思う。これからの日本は景気回復のためには政府は雄大且つ大胆な、そして国外国内両面に対して調和された拡大均衡政策を採ることに依って達成されると思う。吾が国はいまのところ漸く後進国的経済状態から脱皮しつつあるところであり、前述の施策に依って先進国並の経済状態になると思う。講演の後二三会員の質問があり、極めて有意義、閉会となった。なお児玉廉平君、佐藤文四郎君が新しく会員となられ御挨拶があつて散会。八時半。

十月度十日会は、「名古屋ライオン」二階で十一月十二時から行われた。乾杯のあとあの人、この人と同窓の消息を語り合いながら会食に移る。途中増田支部長よりマツキノン先生関係募金状況について説明があり、次いで十日会を含めて同窓生の会合についての所感をのべられ、緑丘の縁につながるわれわれが会合に参加し、顔を合わせて、お互に健康を祝しあうだけでも意義があることを強調された。

「出席者」十四名 蓮田勉二(大一三 佐藤商事) 増田常次郎(大一五 中部証券金融) 湊二郎(昭三 森定興商) 内藤好生(昭一二 内藤印刷所) 森本秀勇(昭一二 中京電機) 山田鳳蔵(昭一七 日光商事) 古川光雄(昭二三 菱和調温工業) 伊東克郎(昭二五 協和銀行) 金沢康雄(昭二五 野村証券投信販売) 福井修(昭二五 野村証券) 青木匡光(昭三三 三菱商事) 加藤利雄(昭三四 加藤政谷商店) 飯物三三男(昭三四 リコー) 佐藤充弘(昭三六 東海銀行)

名古屋支部 十日会

- 昭九 山岸次郎 藤田卓雄 石山利卓 高木重信 高橋重直 武岡達良 金垣英雄 関根英郎 山本俊雄 福田次助

治三 雄健 藤林 斎

昭和10年卒 卒業満30年記念大会

迎 行 会 記 念 満 三 十 年 卒 業 和 十 年 高 商 小 飲



昭和十年学窓を出て三十年半、この記念すべき大会を東京在住合同酒精野口専務、日本航空林氏、小樽在住中島電気商会川島氏等の昨年以来の御骨折で十月十日熱海市伊豆山温泉ホテルさがみやで開催したところ北は十勝浦幌から南は長崎松浦から馳せ参じ、総勢五十七名に、母堂と夫人同伴一名、夫人同伴一名、夫人と同伴一名、それに佐々木理事長はじめ室谷、大谷、木村の旧師を加えて六十七名の多きを数えた。

記念式典は第一部校歌斉唱から始まり、物故恩師伴房次郎先生、手塚、浜林、スミルニツキや先輩代表の飯川文三初代理事長の次に物故同期生の名前を誌した慰霊名と戦死者の大浦、沢田、本間三氏のありし日の佛の遺影を飾った祭壇の前で松尾先生解説の「丘と海と白い雲」のテープレコードの流れる裡に黙禱を捧げ慰霊祭を終り、引き続き対予科戦当時の映画を映写、谷黒のプレストや四谷、野口のジャンプ、中村和之雄先生や高橋次郎先生が出るや思わず喚声があがる。最後に母校五十年記念映画を見て第一部を終了する

第二部

記念撮影後、祝典に入り、野口氏の挨拶に続いて佐々木理事長、室谷先生から祝辞があり、加茂学長、大野先生や不参加の同期生からの祝電披露の後、斎藤応援団長の乾盃で祝宴に移った。その間母校の現況や校舎が近く取り壊され、再建されることなど発表される裡に、元気のよい応援歌が流れ出し、はては盆踊りなど飛び出し、北村忠さんの大太鼓のバチ裁き宜敷くソーラン節、応援歌、

スクラムなど益々盛会となり、宴席の綺麗どころも逆に見物に廻る有様宴席解散後につきぬ想い出話に殆んど深更まで語り合った。

第三部

翌十一日八時半朝食後解散という事であった。

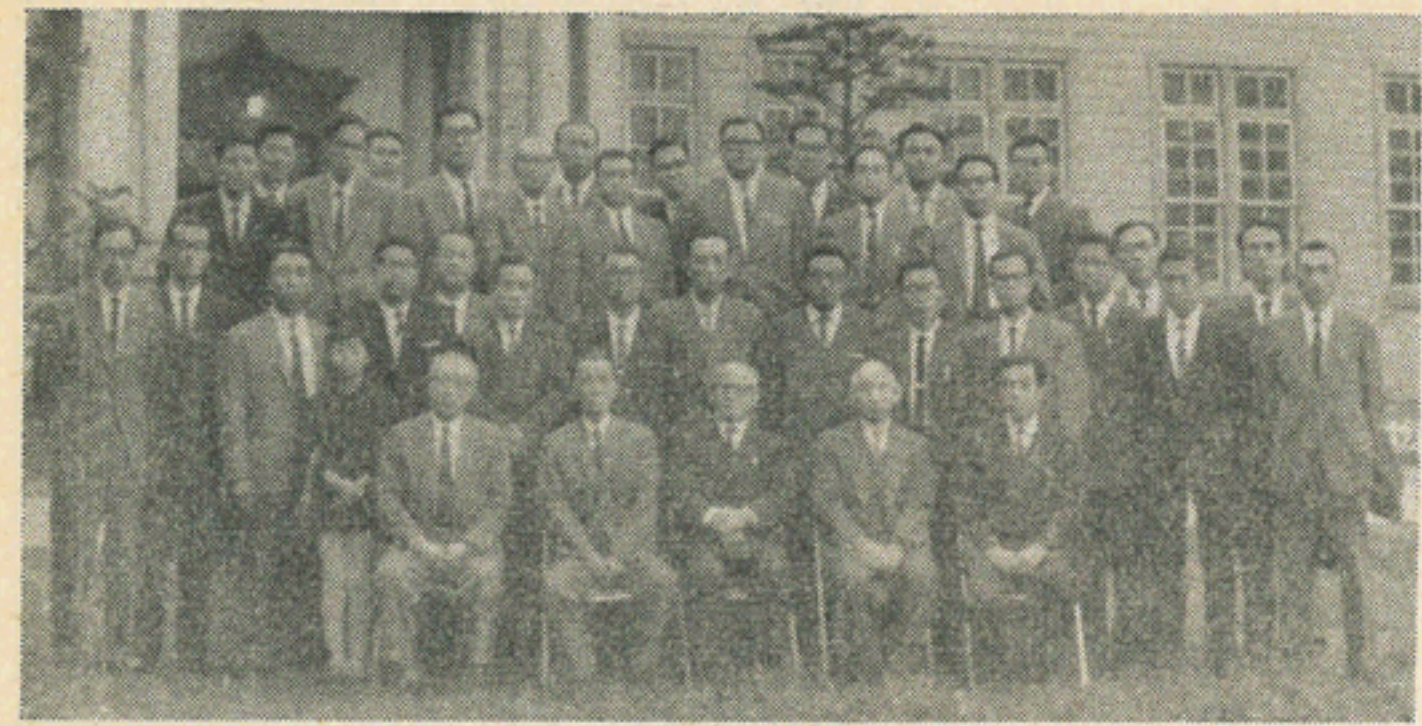
朝食前の逍遙にまた改めて学生時代を語り合い、北岡君が代表で恩師に記念品（東北の翁の能面）の贈呈式があり、引き続き五年後の再会を約し、斎藤応援団長のシメで全国大会は盛況裡に終わった。

なお当日のスナツプをはじめ、大会の模様と各人の家族写真を取り入れたアルバムは十月中に作成の予定で、全出席会員に配布の予定である。当日の出席者は左記の通り
室谷教授、大谷教授、木村教授、佐々木理事長、阿部貞夫、赤木純三、川藤昇、荒川正男、花岡安雄、長谷川旭、林健三、平間義、下田敏平、五十嵐升、池田孝一、今井治男、伊藤雅夫、岩淵五郎、諫早甲一、勝部常夫、川口久治、川島道雄、菊地琢郎、北村匡弘、北村忠、小森三郎、小北勝、森満郎、中条清、沢嘉男、野口正二郎、大原謙一、沼六之助、大友福夫、瀬下雅也、藤誠夫、斎藤雄治、保、杉本敏雄、杉原一男、角江重保、鈴木清五郎、高橋重次、田村清美、田中慶四郎、高橋重二、俵谷孝一、戸塚元一郎、浦弘正、内田岩市、山内忍、四谷勇、長谷川武以上六三名。

三三三会(年昭二十)卒業二十周年を迎えて

母校で同期会 十月二十三日

青く美しく澄みきった秋晴れの日。三々五々と、遠く関東の地からまた全道各地から集まった三十四名の会員を迎えたのは、なつかしの薄緑の校舎、マアキユリーのそびえるバルコニー、紅葉に美しく彩られた母校の庭、前庭にそびえるポプラ、と二十年前にかわらぬ終丘であった。逝く秋を惜しむかのような晩秋のたえずまいが静かな緑ヶ丘にたゆたつ



て、二十年の才月が昨日のようになつかしく会員の胸に去来するようでした。青春の夢をいだいて、学び、語り、遊び、そして恋をした、この丘、この道——それらのすべてが二十年の才月の空白をあたたかくつないでくれるようでした。

既に校舎の一部には槌音も聞こえ建設の譜が、その想い出を少しづつ取り壊して行くような、惜別の情を禁じ得ない。校舎を背景に記念の撮影から三三三会同期会は午後四時に始められました。ちよろど大学祭が開催されており、学生会館はその会場に向けられて、急遽、本校舎、バルコニーを前にした第一会議室に会場を移して開会五時。

大学祭の御多忙中にもかかわらず御参席下さった加茂学長、元Fクラス担任の原岡先生、大分頭の方にも年期が入った石河先生、飄々として少しもかわらぬ松尾先生、それに札幌の出張から馳けつけて下さった木曾先生をお迎えして——長駆、飛行機でかけた伊藤庄吉君(Dクラス)、浅見喜久君(E)を加えて三三三会会員三十四名の顔ぶれは多彩。殆んど卒業以来はじめての再会もあって、二十年前の童顔(?)とピントを合わせることに四苦八苦。アダ名が先にとび出たり、顔は見覚えあれど名前が思い浮ばなかったり。

つづいて瀨尾幸三郎君(F)の東京三三三会の開催(十一月七日、東京目白の椿山荘にて)についての報告があり、加茂学長の御挨拶。日、戦中、戦後の混乱期のさなか、勉強しなかつた割に(?)立派に成長されて、ここに二十周年を迎えたことこの祝福をうける。母校の近況、改築成近い校舎のことなど卒業生に対する細かいお心づかいを謝す。つづいて既に物故された会員十五名に敬虔な黙禱を捧げる。原岡先生の乾杯にて開宴、日頃、宮下新太郎君(D)の面接試験、身体検査にパスした、小樽きつての綺麗どころのホステスの登壇にて会はなめらかに進行する。そのカクテルパーティの中、松尾先生、石河先生、木曾先生、原岡先生の回顧と近況のスピーチを賜わり、折から寄せられた祝電を披露する。東京にて室谷先生から「東の都にあって二十年の集いに会えぬ心残りす、今日の御成功と明日の御発展を祈る」との短歌を寄せての祝電に感謝。さらに高原一雄君(A・北見市)、高橋英夫君(D・大阪市)、松本孝晴君(D・坂出市)、菊地隆君(E・釜石市)および東京三三三会等全国各地から寄せられた、三三三会の盛會と、母校、会員の発展を祈る祝電を有難く拝受する。

宴もたけなわ。会員も皆学生時代にかえつたように、痛飲、談笑。旧交を温める。弊衣破帽、ヨレヨレのマントをまとひ、異臭を放つ手拭を腰にしたパンカラの昔をしのび、蓬髪を撫であげども、今は既にそれも薄く、はかなく、あるいは銀白に彩られ、深く刻まれた皺に二十年の才月を噛みしめる。話は尽きるところなく、卒業のこと、代返、サボタージュ、低空飛行の追試験。学徒動員のつらかったこと、札幌飛行場、女満別の勤労作業等々々。——しかし苦しい想い出も、今にして想えば、ばら色に彩られてなつかしく。昔の四つの寮も今はなく、鉄筋三階建の近代建築を誇る智明寮にかわる。当時の一寮々生の会員による北斗寮々歌、二寮の正気寮々歌、四寮の、原岡元舎監をまじえての玉の井寮々歌、各寮のコーラスから、全員での応援歌、壮行歌と、会員の気持は一つに高まって、夜の緑ヶ丘に響す。木曾先生のリードで学園讃歌 "When I came, when I came to otaru" のコーラス、ついで希望に燃えた、しかも荘重な、校歌の合唱、春とこしえの緑ヶ丘よ。尽きない余情なお綿々として緑ヶ丘に低迷する。

フィナーレは、千葉からの伊藤庄吉君(D)、埼玉県から駆けつけてくれた浅見喜久君(E)の両君による母校の弥栄を祈念しての万才三唱、さらに木曾先生、石河先生による三三三会の発展を祈念しての万才三唱を賜わる。宮下新太郎君(D)の閉会の辞と共に第一次会は終りを告げた。

二次会以降については、ここに割愛させていたたくが、いつはてるともれない小樽の夜の余韻を追いながら、会員たちは三々五々と、又明日の発展のために散って行った。その二十年の感慨を温かく包容するよう小樽の夜は静かに静かにふけていった。(高橋記)



昭和十二年卒

大阪・京都・奈良・四国の同期会 十月二十八日

昭和42年を目ざして

大げさな言い方であるが西日本の昭和十二年が集った。遠く宮内君が四国から飛行機で、林君は奈良から、山村君は京都から夫々目標の六時に馳せて来た。集合場所は新橋薬局八尾勝郎君の事務所二階であった。

今日の欠席者は豊島(松井)保郎、岡田(富田)保司、田中正三、牧野正治、樋口建三の五名で、色々事情があったと思うが、こんな時は努めて出るようにしたいものだ。速くから来る友人は、やっぱり十年前、二十年前の顔を見たいといっていた。

場所の設営は八尾君がやってくれ

た。宮内君は十二指腸潰瘍で入院したと酒をやめていたのは淋しく感じたが、今日のゲスト墓目先輩がさかんに注意をしていた。林君は奈良へ行つて空気の良さを痛感したと述べた。一寸白髪が気になる。森川君は此頃は倒産が多くて多忙極まるが余り金にならないとの事である。矢野君は相変らず温和しく飲み乍ら楽しくカメラのシャッターを切る。山村君は商売熱心だから何か考えながらニコニコやっている。幹事の八尾君は多忙でなかなか席があたゝまらない。座ると飲む程に学生時代舟木と一緒に下宿した娘の物語を愉快地語った。

三十周年記念会(昭和四十二年)に対する関西側の希望

- 【開催場所】①小樽案②熱海案
- 【委員選出】北海道地区 三名
- 関東・甲信越・東北 三名
- 西日本(名古屋以西) 二名
- (名簿作成)各地区委員が、その地区の名簿を纏めること。
- 西日本地区は大阪市北区梅田航空ビル京阪神急行電鉄調査室矢野正郎宛に連絡の事。
- (西日本地区在住会員)
- 浅野(福井)白濁(松山)立石、河内(熊本)山下(高知)森本、矢部、川村、浜井(名古屋)この他本日出席者
- 【出席者】林武、内藤好生、矢野正郎、森川



正明、八尾勝郎、宮内美雄(高知) 山村大兵衛(京都)

【写真説明】

①(前列右から)山村・宮内・八尾(後列)森川、内藤、林、矢野

広告マツタと美術印刷・紙工品

株式会社 三優社

京都市下京区寺町通松原下ル
TEL. (35)0271・4950・7713
取締役社長 山村太兵衛(昭12)

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

昭和十一年卒

卒業

三〇年を来年に控えて会合す

去る九月二十日さむらい会(昭和十一年卒業生の東京附近在住者の会)の例会が東京新富町のテツ金楼で開かれた。中尾弘君、木村頼雄君など精勤組が定刻前から詰めかければ卒業以来始めての小島和夫、鈴木弘一両君が若かりし日の面影を秘めて懐かしい姿を現わす。

定刻よりやゝ遅れて若幹幹事の挨拶で会が始まる。小島幹事より

一、角谷栄作君がガンで死去されたこと。

一、小林憲君が公認会計士の資格を得られたこと。

一、砂子沢正四君が電興開発の社長に就任されたこと。

一、恩師マツキンソン先生母校招待募金のこと。

など報告があり、高橋互君からは小林多喜二碑建立資金に協力されたいと要望があつて、愈々三十周年記念大会実施についての審議に入り、委員高橋正敬君が進行係となつて別項のような実行計画がまとまつた。宴たけなわとなるや、お互に遠慮

のない話はずんで爆笑する者、抱腹絶倒する者ありで、老眼鏡のオツサンも、悟り顔の初老の紳士も、オツトリ構へた社長、部長連まで、一人残らず緑ヶ丘に今遊んでいるような感慨に浸る中に、やがて応援歌に若き日の感激を託して小池輝男君の美声が会場の空気を圧倒する。

北メイ荒れて若き日の
ひた湧く胸の轟きや
……
芋を堀る手に
バットを握り サイサイ
などなど何時果てるともなく続いたが時も移つたので次回は十二月開催を約して散会した。

卒業三十周年記念全国大会

実行計画(昭和十一年卒)

時 昭和四十一年二月十九日二十日の両日

場所 熱海

来賓 恩師招待

委員 高橋互

副委員長 中尾弘、下斗米安蔵

委員 高橋正敬、高木重信

若公次郎、林崎二郎

大田末穂、小島典春

なお各地区の委員に左記の諸兄を委嘱する。

- 北海道地区 越崎清二、本間誠一
- 東北地区 兼子清一郎、小野寺佐
- 東海地区 弓田卯太郎
- 関西、北陸、中国地区 墓目英三
- 四国地区 久松覚一
- 九州地区 藤本雅寿



日立商品特約店

日本電気機器株式会社

取締役社長 天野雅司(大正15年)

本社 サクラバシ日立シヨーストール

大阪市北区曾根崎新地2丁目50番地

電話大阪(361)8871番(代表)

大阪(361)4602番(夜間専用)

緑士会(大11)

越路に遊ぶ

宮地邦介



(太田省三氏撮影)

十月五日夕、栗津温泉に集まる。昨春来の念願だった。顔振れを見れば例年の常連が多いが、御夫人組が増えたのは頼母しいかぎり。(夫人同伴) 太田、中瀬、西村、松岡、井上、竹村、神沢(單身) 相沢六、小橋、三沢、大泉、大場、功刀、杉山、四谷、宮地

計 二十三名(敬称略)

当夜の宿、対岳館は、およそ近代趣味をよそに、広々とした庭園は若むして散見する大小の燈籠や天に聳ゆる樟や松の大樹に見るも、何れ由縁ある宿なるべく、部屋々々の佇まいにも古老を思ふ風格があり、清遊の場所として最適。しかも北陸の名士として諸道に造詣深い神沢御夫妻の心からなる御款待あり、一行先づ其の御配慮振りに感謝。

旅塵をいで湯に流して宴に入る。七方の御夫人も御同席の事として殊の他なごやか！連なる一同の顔々を拝見して私はフト歎仏偈の偈文の中なる「光顔巍巍」の一句を思い出す、釈尊の説かれた御顔に通ずるものに思われた。一同の顔には晴々として光あり、心中和楽の境地が象徴されている。こんな境地は他の如何なる宴にも見られぬ風景とこそ思われた。名利を語る者なく、威張る者としてさらさらなし、只嬉しいのだ。宴酣にして交々立って座興の唄、功刀君の小唄「鶴八、鶴次郎」の名吟を皮切りに夫々年期の入った喉を御披露に及んだが時間切れで相い方美妓の三味の音が無くなり、当夜の真打ち三沢、太田両君の至芸が聞け

なかつたのは如何にも残念だった。それでも流石は太田君、ウイットに富んだ「旅館くら屋夜討ち下駄」の漫談一席で最後を締めくくってくれた。さて本席で特記せねばならぬ事がある。即ち西村君再婚の慶事である。もとより吾れ人共に偕老同穴希うところだが、人の世の常、人生長途の旅、不幸にして片方が欠け、やもめとなつても、六十有余才にしてなおかくしやくとして再婚出来ること、慶事といわずして何んぞやである。期せずして杉山君より提案、一同心から同席の西村君御夫妻に祝意を表し、記念品を贈呈した。九谷焼の夫婦湯呑は永く御二方に愛用されんことを!!

夜中は雨。一行の精進がよかつたとみえ、明るければ快晴、この日のコースは、こられた神沢君ならではの運び方、到底一般観光客の企画し得ぬところ。

那谷寺

対岳館の車を駆って小松市那谷町なる古刹那谷寺を訪う。案内記に曰く「当山は泰澄大師御作の千手観世音菩薩を御本尊とし、一大天然岩窟内、御本殿にその御本体をまつり、人皇五十六代花山法皇が全国観音礼所の総納め所として御開創なされた霊場である」とあり、那谷の名は西国一番の礼所、紀伊の那智山と第三十三番の礼所美濃の谷汲山の各一字をとって勅定されしとか。

賀藩の御紙屋職を祖にもつ坂本某の那谷寺瀧絵はがき由来記によれば「男性的な奇岩、女性的な建築其の総てを包む紅葉、その様まさに北陸路の庄巻である……一日那谷寺に遊び、その外景の美しさ心にしみる内面的床しさに引入れられ……」と書いてあり正に実感である。一行の中、宗匠格ともいふべき功刀君が一句をものして興を添える。

安宅の関

小松市に入り、天下の小松製作本社工場や、羽田空港の三倍もありという広大な小松飛行場を経て、安宅の関に至る。いまは昔の面影もなく、平坦な小松林のかた辺にちよつとした広場があり、そこに往年の名優が演じた勸進帳を型どった銅像が丈余の台に立てられていて、僅に古事を偲ぶよすがとなつていて、蓋し大正、昭和に亘り議政壇上の雄なりし永井柳太郎の寄進にかゝるもの、一行の老連には遠き昔の物語よりも、むしろ寄進者永井氏の大隈張りの英姿が目につく、彼の名演説「西にレーニン、東に原宰相」「来たり、見たり、破れたり」「暁の鐘、暮の鐘」等の演題が思い出された事だった。

千代尼庵

金沢路を車は走り、途中加賀松任なる千代尼庵を訪う、聖興寺境内に在る。千代尼は人も知る加賀の千代女のこと。庵は茶室造りの簡素な佇まい、学風庵と偏額が掲げてある。傍らに千代塚と示した句碑があり、辞世の句として

月も見て我はこの世をかしく哉

千代尼

と刻んである。元禄十六年(一七〇三)表具師福増屋に生まれ、句作二千句におよび、一代の才媛と称えられ、安永四年(一七七五)七三才で永眠。没後各地の文人墨客からの弔詞や悼句はおびただしく、千代尼の麗筆と共に一堂に展示されている。こゝに千代尼の代表作二、三を書き連ねるのも無駄ではなからう。

朝がほにつるべとられてもらい水いざよいやまだ誰れ誰れも見えぬうち

初雪は朝ねに雫見せにけりこゝで松任聖興寺に千代塚を訪ねてと題し、明治の文豪徳富蘆花の悼歌を見つけた。一行のもの等しく感じ入ったので、この歌を紹介し千代尼庵に名残りを惜しむことにしよう。

二百年早く生れて加賀にあらばひとにはやらじ千代といふ女

成巽閣と三芳庵
松任にて神沢君心やりの加賀名物「円八あんころ餅」を御土産に買らう。車中早くも、これを賞味したのもいた。

車は愈々兼六園に到着、流石に天下の名庭園、余りに人口に眩多し、既に秋色をたゝえた清冽華麗な絶景は改めて語る迄もなく、其の境内に在る成巽閣と三芳庵については少しく筆を走らせねばならない。

成巽閣は文久三年(一八六三)三代藩主前田齊泰が母堂真龍院の隠居所として建てし由、兼六園の東南隅にあるため、この名ありと聞く、内に各代藩公の遺品が陳列され、流石に加賀百万石の偉容を物語っている。いまに至って甲冑や華麗な火事装束を見れば何んとなく歌舞伎を連想されるは不謹慎だろうか。十五代藩公の奥方が腰入れの折、召されたという打掛けも飾られていたが、背中の御紋は里方のものと聞いた。抱き若荷の縫い紋である。鍋島家の定紋と見て、ほのかに懐しさを覚えた。

成巽閣を辞して三芳庵に入る。簡素な門柱に木片を掲げ御家流にて、「みよし庵」と書いてある。老松、古木に囲まれた閑雅な佇まい、海抜四〇〇余尺の高台にあり、盛夏尚二、十八度を越ゆることなしとのこと、藩公盛んなりし頃より密談の場所に選ばれ、いまに至るも官庁方面の要談の場として親しまれる由。

一行は先づ本座敷に招ぜられて抹茶の接待に預かる。ところで知らぬ者程強きものなく茶道に暗い私が誤って正客に推され冷汗三斗だったのが庵主であり、御茶の先生でもある新蔵正師の御点前と御運びの御女中方に助けられ、兎にも角にも一同降りなく御服加減の御茶を頂戴し、御詰めは斯道に通ぜられる神沢夫人なれ

ばホットした。それにしても庵主新蔵師の清楚な和服姿に接し、何れ名器とおぼしき古式の釜や色調とりどりの茶碗を拝見し、心気自から静かに和ごむ思いがした。

終つて中食、選ばれた膳部を眺めて先づ感嘆した、器と云い料理と云い正に大名料理である。名物のジブ煮を始め庵主肝入りの馳走に舌鼓を鳴らしたことは無論のこと、全く冥加に尽きるもてなし振り、蓋し当日の庄巻であつた。

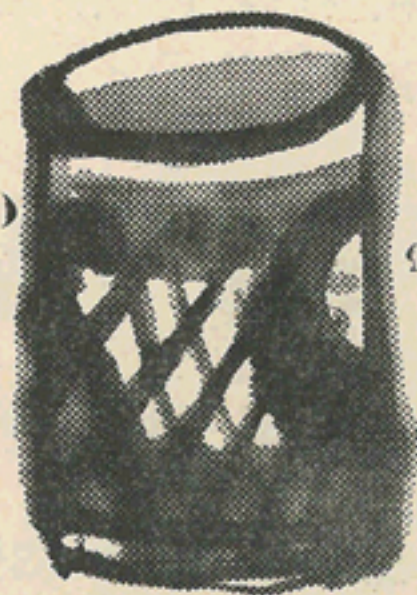
土師岡光仙窯

最後のコースは九谷焼の窯元、特に選んだ土師岡光仙窯を見学、陶芸家利岡氏の陶技を拝見、ロクロの廻転を唯一のよるべとして手練の妙技を見る見る茶碗や徳利の素陶が出来た。これを干して釉色し窯に入れて焼き付け陶器となる手順である。窯は多量生産を目的として科学的に出来ている。出来上つた作品も沢山陳列してあつたが、矢張り九谷の特長である色調が濃麗なもの多く、僅かに抹茶茶碗に古代民芸品の名残りとどめて見ると見た。

斯くて全コースは総べて終つた。老童連も流石に疲れたらしい。おのが自々、再会を約して袂を別つたが来年は東京、再来年は小樽に集まることを決め、こうして庭の飛石よろしく年々再々々と楽しみを設けて行くことにした。これも長生きの一方法なるべし。

住所変更
上田一喜(昭三四)
武生市村国町八四 春日荘
砥上朝雄(六一〇)
神戸市須磨区千守町一丁目五一の一〇 須磨寺コーポ
加藤一幸(昭三六)
名古屋守山区大字幸心字河原一四ノ二 守山荘内

事務所変更
(名古屋支部移転)
愛知県瀬戸市陶原町四丁目二〇
梯加藤政谷商店内



いまも浮ぶ楽しかった 昭一七クラス会

野沢梯三君の司会進行係の下に苦米地前校長の挨拶に始まり「近年稀にみる同期会総会であり、母校に五十八名の参集をみたことは他に例を見ない。この同期の諸君は戦時中の恵まれない時、学徒戦士として巣立ち送り出す私の心中も非常にうれしかったが、諸君は苦境のなかに鍛えられ母校をよく忘れず、しかも学友の慰霊祭を営む気持に至っては小樽の誇りとしたい」と続いて加茂学長から、「地元にも在っても十一人からの旧恩師が一堂に出席する同期会は始めてである。之から社会的上位に位置して行く諸君は母校の名を高めて頂き巣立って行く後輩の指導によりよく御力添えを望む」と力強い激励があった。恩師退場し総会に入る。

地獄坂の並木やクラシックな中央階段等は思はず足を止めさせ、二十数年前の思い出を蘇生させる特異な力を秘めていた。全く感慨無量の一言である。

午後三時より場所を緑町正法寺に移し、同期の戦没者や病死者を悼う追悼式を挙げる、全員焼香す。

地下の友よ、安らかに眠れ
友の無きが淋しいが、決して忘れていけないぞ

荘厳な追悼式のなかに読経の声も一段と堂内の隅々にしみ渡った。苦さんが弱った足を一步一歩踏みしめ乍ら寺から出て来られる姿には頭が



下った。ステッキを頼りながらも、この会合に出席して下さる師弟愛が小樽の伝統であり、団結であろう。夕刻一同の車は「はせ川」に入る。

パーティ開催に先立ち苦さんからマツキンノンが渡辺校長に叱られた青年時代の昔物語りから始まりマツキンノンが母校に懐く愛情と寝食忘れの教育熱に彼の人格を再認識させられ、戦中戦後を境にしての不運な彼、そして最後に彼の望みを達させ、師弟を結ぶ小樽ならではの訪日美談史を是非実現させることに即決す。

加茂学長より戦歿学徒の碑建立の計画説明があった。大野さんの乾杯でいよいよ開宴、昔の酒豪連中はいまでも同じ、地金まる出してグイグイアルコールのメーターも上って来た処で出席先生達の近況報告、挨拶等、全く昔の性格そのまゝで爆笑爆笑宴紺にして止まるところ知らず、ついに野沢応援団長出て校歌、進軍歌、応援歌にうつる。ストーム態勢で、まさに昔を再現、「コッパミジン」にやれば「はせ川」の床もぬけて損害賠償にもならんとみて、これだけは手取君が中止命令、室賢がエンヂン内に飛入っての踊り、氣勢最高頂に達した処で苦さん加茂さんは全員拍手喝采の中を退場。その後各四寮の寮歌で対寮試合、結局一寮が優秀であったようだ。二時間半におよび、閉宴とす。

昔し懐しい小樽の夜へ二次会に出るもの、麻雀に卓を囲む者、思出話にしんみり語り合う者、夜の「はせ川」亭も三十回生にかかつては寮も同然。明けて二十二日、昨夜の夢も今朝は優等生姿で朝食、大野さんが朝の談話として「兎角長生きしてほしい」といえばムロケンが謡曲を一席、海崎、穀谷両君で欠席者よりの便りを発表朗読。吾等の同期会の名称の名付役を恩師に依頼する。マツキンノン訪日協賛募金受付、かくして二十三年間の血の流れは緑ヶ丘を忘れてはいなかったのである。そして「三年後は東京で会いましょう」が合言葉となった。

世の波が寄せては返す二十三年
契り友岩未だ朽ちせず。
(阿部啓作 記)

電線管・一般機械・構造用鋼管・一般鋼材
水道管・白黒瓦斯管・ビニール管及附属品

株式会社 新高屋商会

取締役社長 桜井純一 (昭23年)

大阪市北区紅梅町88 電話 (358) 5881~5

大阪 緑丘十日会

十月度例会

(第七二回)

十月十日会(十一日)は四谷宗義氏(大一一)の「セールスマンの経営学」について約三〇分、同氏の著書を中心にお話を願った。

支部長から今回初めて出席された村山重三郎氏(昭一一) 飯物資郎氏(昭三〇)や東京・大阪を半月宛往復するという河井弘之氏(昭一三)の紹介あり、昼食の後、いよいよ待望の四谷氏の「セールスマンの経営学」に入った。

協和商事社長として、折りにふれて感じた経営方針をノートに認めていたものを御令息死亡を機会に毎月数章句づつビジョン達成のため、月々の言葉として披露していたものを纏めて「セールスマンの経営学」として自費出版された。

彼は謙遜して、われわれ中小企業はというが、大企業へのビジョンを持ち、構成している人間関係に細心の注意を払い公平の原則を採用し、従業員に大きい夢を育てさすため、



温室で育ったものは颱風に弱い、会社のなかで働くと思うな、賞与も自分自身の努力でカチ取れ、収益というものは回収あってこそ売上の偉力

となるものであると説く。

経営者の勤務時間にも言及し、他から一切拘束されず、ただ自由意志で会社発展のために努力すること、これは経営者の当然の任務であるという。また拘束の苦痛を感じず、我を忘れて与えられた仕事に興味を感じて成果があがるようになれば、苦しみのない労働、希望のある労働となるとも説いて「経営者の勤務時間は二十四時間なり」という説に自己批判を加えた。

そして私の経営はダイヤモンド経営である。即ちダイヤは中央の面を囲んで十数個、数十個の面が研を競って燦然として光る。これ等各個の面が一つに集って全をなす。しかしこの個は全あつての個であると企業に対する信念を披歴して本日の講演を閉じた。この熱のこもった講演に全員拍手を送った次第である。続い

- て(大一一)大塚氏(アサヒ運送)は「本部会報」と「ヒキメ緑丘」に言及し「緑丘」の発展に対する一同の意見を求めた。
- (出席者)
- 椎名幾三郎先生
(大一一)宮地邦介、四谷宗義、杉山昌作
(大一一)田中弥三郎、喜多村久盛
(大一一)大塚武雄、天野雅司
(昭二二)石田平八、渡辺祥吉、黒羽秀夫
(昭一〇)大島三郎
(昭一一)村山重三郎、暮目英三
(昭一二)矢野正郎
(昭一三)河井弘之、若山永太郎
(昭一四)市橋宏一郎
(昭一六後)高橋弘八
(昭二三)桜井純一
(昭三〇)飯物資郎
(昭三四)角响

貴方の
アラムを
いつまでも
フレッシュに!!

美容室 三工 有限会社
河上 恵美子
河上 銀男 (昭和11年前卒)

梅田の店 大阪市北区高垣町 83
TEL. (312) 0107
桜瀬の店 尼崎市中 杭瀬本町 1丁目 9-12

オリンピック以来
ユニークなアイデアを買われた!

各国代表料理缶詰シリーズ



世界の味

只今!! 販売店サービスとして
異質業界で絶賛好評!!

販売促進用景品

(セールズ プロモーション)

料理指導
江上料理学院長
江上トミ先生

居ながら楽しめる

各国代表料理の缶詰

日本	すきやき
ロシア	ボルシチ
イタリア	ミートソース
ハンガリー	ビーフシチュー
アメリカ	コンスープ
イギリス	トマトスープ
フランス	デミグラス・ソース
ドイツ	ハンバーグ・ステーキ
シシリー	スパゲッティグラタン
インド	ビーフカレー
スペイン	スパニッシュライス
オランダ	いちごチャム
ポルトガル	ママレード

各種セット組合せ調製



新発売
ホームカレー

エム・シー・シー食品株式会社

代表取締役 水垣敏正 (昭五卒)

神戸市長田区苅薬通5丁目15 TEL 神戸 (67) 1245(代)

某月某日 (金)

正午、東京事務局長神田氏を訪問。マツキノン募金の応募状況について、前号「緑丘」掲載金額が本部と東京が入れ替りになったという事(ミスのありました事を訂正いたします)その後の状況については二五頁に掲載しましたとおりです。昼食を共にしよう誘われるま、サツポロピヤホールに行く、神田氏へ送る「緑丘」六部は誰れに配布しているかの問いからはじまって、東京緑丘人についての話題や苦米地先生特集号の投稿が六〇名に及ぶので、またもや嬉しいやら、経費不足の心配やらで今複雑な心境であり、広告については特に東京支部の協力をお願いしたいと訴える。マツキノン先生の情報は太谷先生だけが知っておられるとの事で、ピヤホールから電話する。太谷先生は大阪へ行つて明日お帰りという。

今日のスケジュールは苦米地先生宅を訪問、そして毎日新聞記者O氏に会うのが、予定である。敬称が「神田さん」から「神田オヤジ」と荒れて来た。何んの話をしていたか今考えても思い出せぬ位飲んだようである。さらいなオヤジなら話は途中で打ち切つて、すぐ飛び出したかも知れない。「お前は面白い男だ」とオヤジが云つた事ぐらいいが頭に残っている。苦米地先生宅へ電話をかけ、すぐ銀座から出発する事を告げ、道順をノートに書いた。そのノートをたよりにバスを降りてから、かどの牛乳屋さんに聞くにすぐわかった。

某月某日

編集部

先生のもとを辞して、約束の毎日新聞社へ走った。もう九時を過ぎていた。私を待っていたO氏は喜んで迎へ、二人は有楽町の食道街へ消えていった。

某月某日 (土)
今日は会社の計画休暇である。上野でルオ一遺作展と独立展、二紀会展を見て三越で国際形象展、伊勢丹で中村善策個展、イタリヤ展、近代美術館で在外日本作家展、を見る計画をたてて美術の秋にふさわしく足と地下鉄をたよりに九時半宿を出た。

私は感激にひたりながら、一枚一枚喰い入るように眺めて廻つた。
京・国立西洋美術館で公開されたものは一九〇七年ごろの初期から近作まで百八十一点であった。
彼独自の絵の具を重ねてゆく技術の問題、うす塗りによる発色の鮮明さ、または絵の上に描いた白チヨウクの修正の跡などには制作の中の苦しみが見え、また未だのものには完成品に見られぬ魅力があり、筆の走りは鉄斎を思ふものがあった。



形65 象国際展

西洋美術館を出て二紀会展に走った。尾形圭介君(昭三四)の絵が見たかったからであった。二紀会を終つて、独立展へと移つた。今年の独立展は二紀会をはるかにしのぐものがあった。自由美術展もやっていたが主力の抜けた自由美術には食指が動かなかったのと国際形象展への気持があせり、再び地下鉄で三越へ戻つた。現代洋画家の世界を代表する作品がズラリと並び、最近の傾向を知るに役立つ。思いもつげぬ栗谷川健一ポスター展(北海道観光)に出合ふ。

予定変更して資生堂ギャラリーに足を向けたのが、そもそも今日の予定をがらりと変更させた。それは「緑丘人」の網に引かされたことである。
銀座を歩いていると肩をポンとたたく「暮目さんでないですか」というのは大野君(昭一三)。どうして判つたらうというところ、では充分時間があるからと「三平」に案内された。準備中の店に上つて、まあまあときた。困つた事になったが二人に一人ではかなわぬ。齋藤さんには昭一〇年(三〇周年)の原稿を依頼した御恩があるのであとの美術コースはこのあとと思つた。しかし、二人は私をうながして席をかえ出した。
今度は山形の山菜料理でとの事、おみさんは小樽産という。珍らしい山菜をいただいている中に六時過ぎ二人のボデイガードにそわれて日航ターミナルへ走つた。

某月某日 (月)

札幌戸谷太通三氏(昭一三)はこの緑丘誌のため、一週間に一回北海道新聞、北海タイムス、朝日新聞(北海道版)から緑丘関係記事をスクラップして流してくれる。緑丘編集部にはなくてはならぬ札幌支局長である。今日も学長選挙の経過と勲二等旭日重光章佐々木周一氏(赤鉛筆で印を入れ)の授賞をスクラップしてきた。すぐ佐々木周一さんに祝電を打つ。(編集部見落しの失敗)緑丘の小樽支局長は鈴木三七さん(昭八)である。札幌から電話。学長選挙の結果大泉さんに決定したが、大泉さんは断つたよ。松尾、浜林、古瀬さんたちが上京して懇請されたようだがね。加茂さんか?小樽を去るだろうよ。原稿の書きようがないって?トツプか?函館へ出張して来るよ。またかけるから...。ガチャン。